

美しい伊豆創造センター 御中

ビッグデータ活用による 観光客動線調査業務 報告書

＜サマリー版＞



2017年3月17日
株式会社リクルートライフスタイル
じゃらんリサーチセンター

目次

1. 前提条件の確認	P 2	～	6
2. ビッグデータ活用による観光客導線調査			
(1) 観光客に関する分析	P 7	～	11
(2) 交通手段に関する分析	P 12	～	15
(3) 立寄りに関する分析	P 16	～	18
(4) 周遊に関する分析	P 19	～	21
(5) 観光地の相関関係に関する分析	P 22	～	24
(6) 旅程に関する分析	P 25	～	27
(7) 宿泊地に関する分析	P 28	～	32
(8) 季節・曜日に関する分析	P 33	～	39
3. 考察	P 40	～	55

前提条件の確認

目的

G P S（Global Positioning System：全地球測位システム）機能により蓄積される位置情報等を用いて観光客の行動及び動態を把握し、伊豆半島の観光の実態を明らかにする

分析項目

- 【１】観光客に関する分析
- 【２】交通手段に関する分析
- 【３】立寄りに関する分析
- 【４】周遊に関する分析
- 【５】観光地の相関関係に関する分析
- 【６】旅程に関する分析
- 【７】宿泊地に関する分析
- 【８】季節・曜日に関する分析

前提条件の確認

定義

【データ利用期間】 2016/1/1～2016/12/31

【動態観測対象】 伊豆半島エリアに来訪した人のうち、居住者・通勤者を除外した観光客
※本調査は生活圏のデータを除外しています

【動態観測対象ユーザー実数】 伊豆半島全体：68,695サンプル
沼津市（19,559）、熱海市（19,093）、三島市（11,195）、伊東市（21,029）、下田市（7,470）、
伊豆市（12,089）、伊豆の国市（8,271）、
東伊豆町（6,484）、河津町（3,665）、南伊豆町（3,219）、松崎町（1,776）、西伊豆町
（2,852）、
函南町（2,987）
※サンプル数は期間内における各市区町村毎のユニーク数となります。
例：伊東市と伊豆の国市を観光した場合、各市それぞれに1サンプルずつカウントされます

【属性定義】 性別（男性／女性）×年齢層（～34歳／35～49歳／50歳～）
※リクルートライフスタイル社及びブログウォッチャー社の提携アプリのユーザーから許諾を得て取得
※属性データはじゃらんnet、およびリクルート各サービスデータより推計し統計処理しています
※観光客データは地域住民や通過者を可能な限り除く処理を入れて判定したユーザーです
※属性データは全データのうち、取得可能なユーザーのデータのみ集計対象となります

【季節定義】（気象庁の定義より）

＜春＞3月～5月 ＜夏＞6月～8月 ＜秋＞9月～11月 ＜冬＞12月～2月

※本レポートには個人を特定できる情報は一切含まれておりません

前提条件の確認

地域定義

北海道・東北（北海道、青森県、岩手県、宮城県、秋田県、山形県、福島県）

北関東（茨城県、栃木県、群馬県）

首都圏（埼玉県、千葉県、東京都、神奈川県）

甲信越・北陸（新潟県、富山県、石川県、福井県、山梨県、長野県）

東海（岐阜県、静岡県、愛知県、三重県）

近畿（滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県、和歌山県）

中国（鳥取県、島根県、岡山県、広島県、山口県）

四国（徳島県、香川県、愛媛県、高知県）

九州・沖縄（福岡県、佐賀県、長崎県、熊本県、大分県、宮崎県、鹿児島県、沖縄県）

来訪カレンダー定義

旅程を出発日のカレンダー【平日／休日】により分類

平日：主に月～金曜日

休日：主に土～日曜日

前提条件の確認

【観光客判定】 生活圏（※ 1）から大きく外れた行動をしているユーザーを観光客と判定

【宿泊地判定】 22時～翌8時の間に最も長く滞在した場所

※ 時間内にデータ取得がなかった場合は宿泊地不明とする

※ 2泊以上の旅程者は1泊でも宿泊地が不明な場合は宿泊地不明とする

【旅程定義】 旅程を域内泊あり／なしに応じて下記3項に分類

1. 日帰り：旅程に宿泊が含まれない観光客

2. 域内泊あり（1～2泊、3泊以上）

3. 域外泊のみ（1～2泊、3泊以上）

【滞在時間】 分析対象地域／観光エリアで観光客が滞在した時間の平均滞在時間

【観光エリア（伊豆）来訪判定】 ユーザーが観光エリア内にて位置情報ログが計測された場合

【流入経路判定】 指定した経路上に位置情報ログが複数あった場合に、その観光客の流入経路と判定

【秘匿処理】 個人情報保護観点から、実数が10人以下になるデータは「----」と表記

※ 1 位置情報の密度準拠による機械学習システムにより、ユーザー毎の生活圏を判定

※ 2 本レポートには個人を特定できる情報は一切含まれておりません

前提条件の確認 ～「観光客」判定の分析手法について～

定常的に取得している行動データから「観光客」であるかを判定し、居住者と観光客を混同しない、観光客を抽出した分析を行いました。

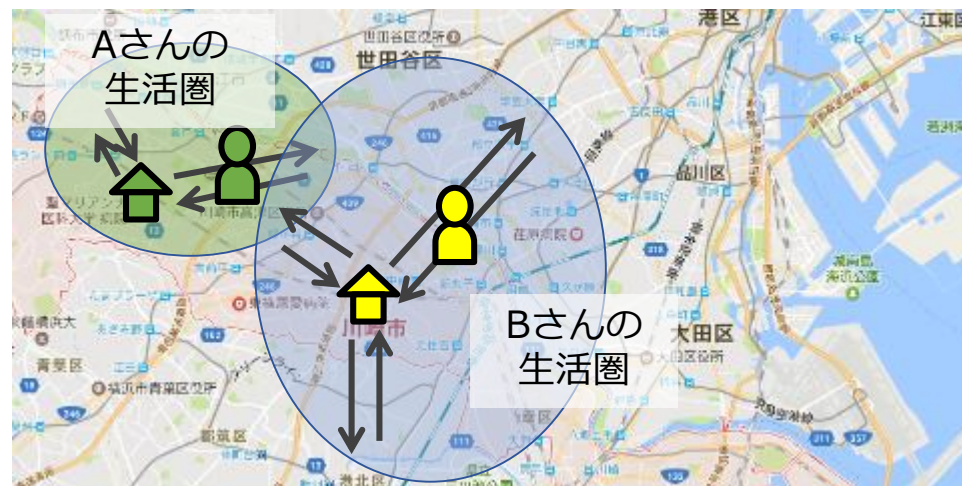
I. 自宅・生活圏判定

定常的に取得している行動（位置）データ情報に対し、機械学習(密度準拠のクラスタリング手法)を行うことで、各々の生活圏を割り出す深夜帯の行動データの出現頻度が高いものに着目し、自宅を判定する

※生活圏の広さはユーザによって異なります

II. 観光判定

I.の、自宅・生活圏判定で割り出した生活圏から外れた位置情報データ行動をしている場合において、「観光」と判定する。



観光客に関する分析

どこからどのくらい来ているか

2016年1月1日～2016年12月31日まで、伊豆半島（伊豆半島全域、および各13市町単位）を訪れた、国内に居住する観光客がどこからどのくらい訪れているかを地域別、県別、市区町村別、属性別（性別・年代）に分析します。

※都道府県・市区町村別データは上位のみ表示しています。

※伊豆半島エリアに一定時間滞在した人を対象に分析します。

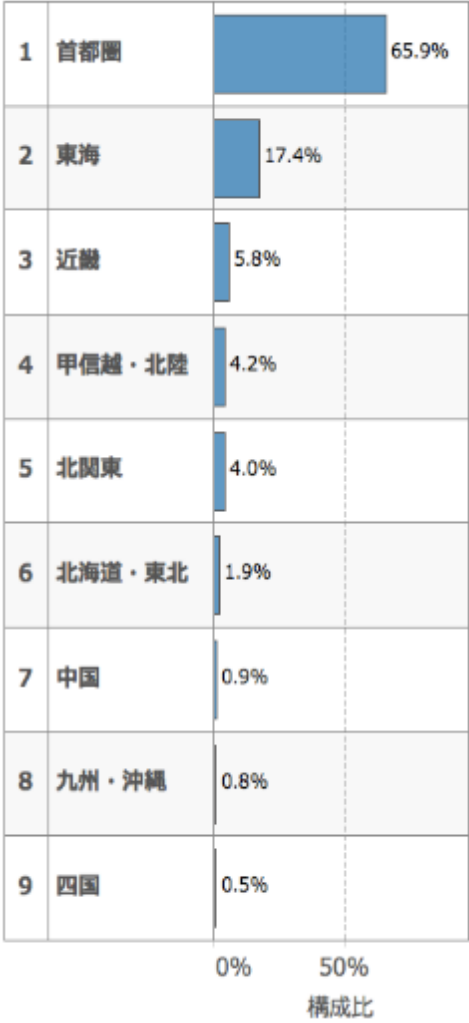
発地分析（地域別）伊豆半島7市6町（合計）

伊豆半島7市6町を訪れた観光客は、首都圏からの来訪が最も多く約66%。次いで東海が約17%、近畿が約6%となっている。性年代別ではいずれの地域とも男女50歳以上が最も多い。

発地毎の来訪者数(地域別)

1	首都圏	45,300人
2	東海	11,943人
3	近畿	4,018人
4	甲信越・北陸	2,902人
5	北関東	2,768人
6	北海道・東北	1,271人
7	中国	603人
8	九州・沖縄	533人
9	四国	320人
総計		68,695人

発地毎の来訪者構成比(地域別)



発地毎の来訪者 性年代構成比(都道府県別：TOP10：ウェイトバック)

		女性			男性		
		10歳～34歳	35歳～49歳	50歳以上	10歳～34歳	35歳～49歳	50歳以上
1	首都圏	13.6%	11.2%	30.0%	12.6%	10.2%	22.5%
2	東海	11.1%	11.2%	18.7%	17.5%	17.4%	24.0%
3	近畿	13.0%	16.5%	30.3%	9.7%	12.1%	18.4%
4	甲信越・北陸	7.7%	10.4%	15.3%	16.9%	22.4%	27.2%
5	北関東	26.6%	10.7%	23.6%	18.5%	7.3%	13.3%
6	北海道・東北	7.4%	14.2%	31.2%	7.5%	14.1%	25.7%
7	中国	7.4%	16.2%	41.6%	4.5%	9.7%	20.6%
8	九州・沖縄	6.0%	-----	33.5%	10.9%	-----	49.7%
9	四国	-----	-----	-----	-----	100.0%	-----

※性年代構成比は、属性（性別・年代）取得できたユーザーのみで集計
※データ件数の少ない地域は秘匿処理の為除外
※ウェイトバックは日本の人口構成比を参考にして推計
※観光客を発地ごとにユニークカウントで算出しております。
そのため、分析期間内に発地が変わった方はそれぞれの地域でカウントされるため、引越したり単身赴任の方の分、構成比が100%からずれる可能性がございます。

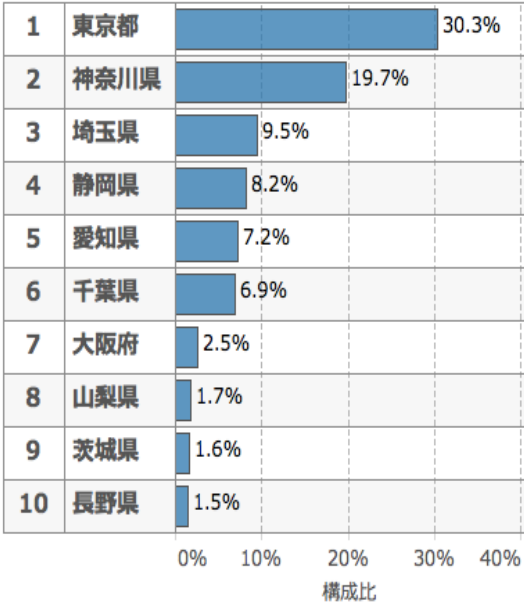
発地分析（都道府県別）伊豆半島7市6町（合計）

都道府県別では東京都が最も多く約30%。次いで神奈川県が約20%、埼玉県が約9%。
性年代別では東京都、神奈川県、埼玉県の男女とも、50歳以上が最も多い。

発地毎の来訪者数(都道府県別)

1	東京都	20,781人
2	神奈川県	13,558人
3	埼玉県	6,506人
4	静岡県	5,617人
5	愛知県	4,931人
6	千葉県	4,770人
7	大阪府	1,718人
8	山梨県	1,202人
9	茨城県	1,110人
10	長野県	1,044人
総計		68,695人

発地毎の来訪者構成比(都道府県別)



※TOP11以下：7,458人 / 10.9%

発地毎の来訪者 性年代構成比(都道府県別：TOP10：ウェイトバック)

順位	都道府県	女性			男性		
		10歳~34歳	35歳~49歳	50歳以上	10歳~34歳	35歳~49歳	50歳以上
1	東京都	12.5%	12.0%	26.0%	13.6%	12.8%	23.1%
2	神奈川県	12.7%	9.4%	29.8%	13.3%	9.6%	25.2%
3	埼玉県	12.5%	9.1%	44.5%	7.3%	5.3%	21.2%
4	静岡県	13.1%	11.9%	18.8%	18.4%	16.4%	21.4%
5	愛知県	10.8%	10.1%	21.6%	16.2%	14.9%	26.4%
6	千葉県	28.2%	19.6%	21.6%	13.3%	9.1%	8.3%
7	大阪府	17.0%	21.7%	31.9%	7.8%	9.7%	11.8%
8	山梨県	8.8%	11.3%	12.4%	19.9%	24.9%	22.7%
9	茨城県	64.7%	35.3%	-----	-----	-----	-----
10	長野県	7.9%	12.1%	17.7%	14.4%	21.6%	26.3%

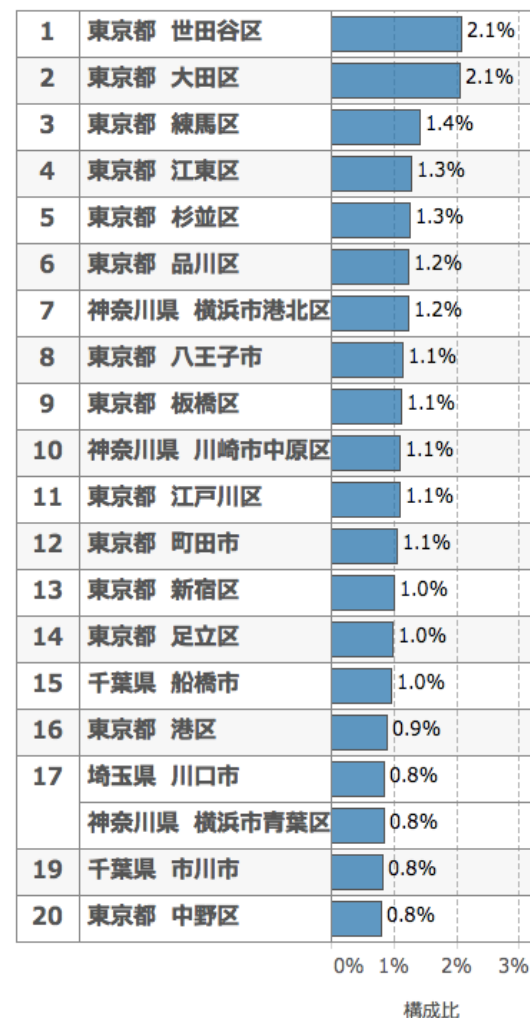
※性年代構成比は、属性（性別・年代）取得できたユーザーのみで集計
※データ件数の少ない地域は秘匿処理の為除外
※ウェイトバックは日本の人口構成比を参考にして推計
※観光客を発地ごとにユニークカウントで算出しております。
そのため、分析期間内に発地が変わった方はそれぞれの地域でカウントされるため、引越や単身赴任の方の分、構成比が100%からずれる可能性があります。

発地分析（市区町村）伊豆半島7市6町（合計）

発地毎の来訪者数(市区町村別)

1	東京都 世田谷区	1,433人
2	東京都 大田区	1,414人
3	東京都 練馬区	979人
4	東京都 江東区	884人
5	東京都 杉並区	867人
6	東京都 品川区	848人
7	神奈川県 横浜市港北区	843人
8	東京都 八王子市	781人
9	東京都 板橋区	774人
10	神奈川県 川崎市中原区	752人
11	東京都 江戸川区	746人
12	東京都 町田市	724人
13	東京都 新宿区	690人
14	東京都 足立区	670人
15	千葉県 船橋市	660人
16	東京都 港区	613人
17	埼玉県 川口市	576人
	神奈川県 横浜市青葉区	576人
19	千葉県 市川市	566人
20	東京都 中野区	541人
総計		68,695人

発地毎の来訪者構成比(市区町村別)



※TOP21以下：52,758人 / 7.7%

＜東京都南西部に主要な発地が集まる＞

伊豆半島への来訪発地を見ると首都圏でも南部、西部に主要発地が集中している。

上位6つは東京都世田谷区・大田区・練馬区・江東区・杉並区・品川区が並んでおり、全体の9.4%を占めるほどになっている。

同地域において、移動の距離と時間を考えると、南部であれば房総半島、西部であれば山梨県や長野県と比較検討をされることが想定される。

また、伊豆半島に程近い箱根も比較検討をされる地域である。

伊豆半島への誘客を図るプロモーションを行う際には、これら競合地域との差別化を発地と合わせて考えていく必要がある。

＜来訪比率が高い50歳以上、低い若年層＞

来訪発地ごとにややばらつきはあるものの、50歳以上の観光客が多く来訪していることがわかる。

来訪比率の高い50歳以上のリピーター化や、周遊を高める資源整理を行う一方で、

比較的来訪比率の低い「若者」という新規カスタマーの掘り起し策を深めることが必要と思われる。また、若者の車離れが進む中、二次交通の整備等で新しい旅の過ごし方の提案が求められる。

交通手段に関する分析

どの交通経路を利用して各エリアに流入・流出したか

2016年1月1日～2016年12月31日まで、伊豆半島（伊豆半島全域、および各13市町単位）を訪れた国内に居住する観光客がどこからどのくらい訪れているかを地域別、県別、市区町村別、属性別（性別・年代）に分析します。

交通手段に関する分析の見方

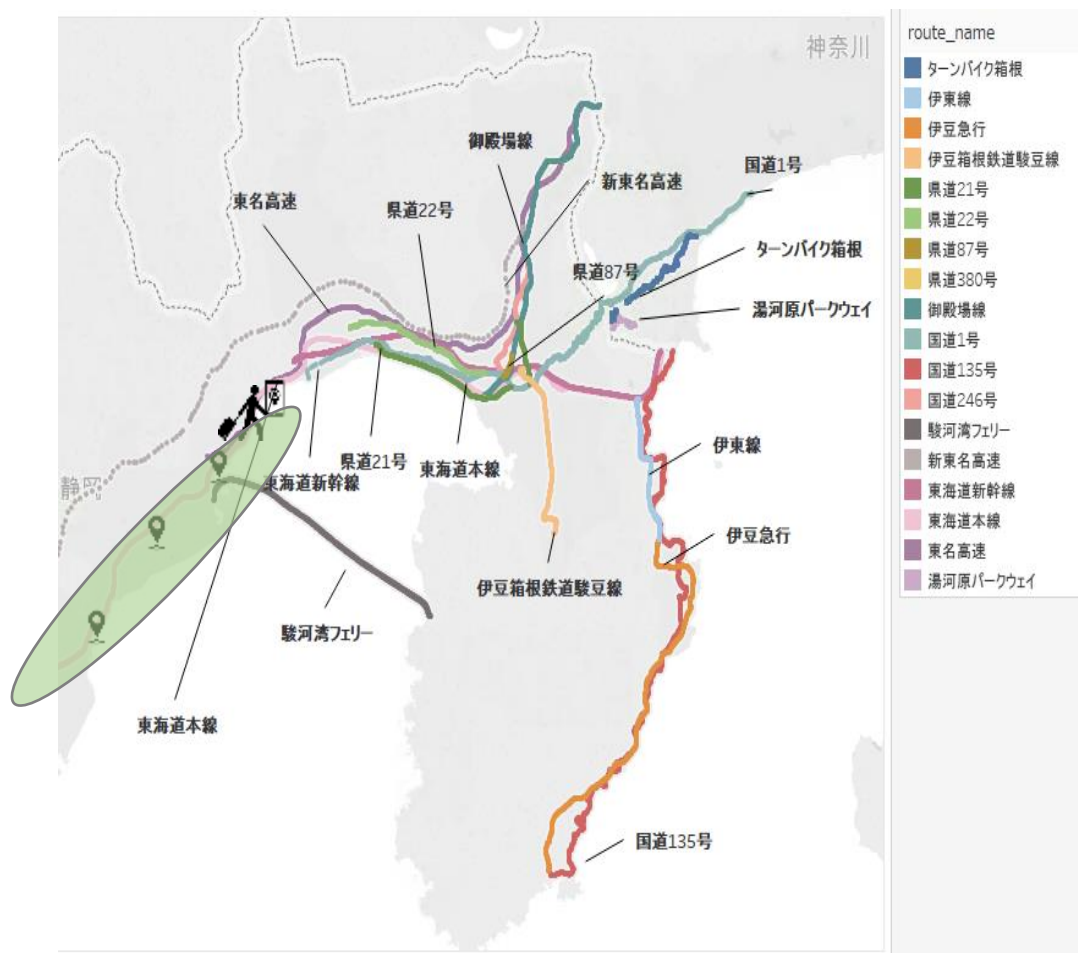
あらかじめ指定した経路上に観光客の位置情報ログが“複数”重なる場合に経路を特定。

13市町へ来訪した際の旅程中に利用した経路をデータとして推定。

※複数の経路を利用した場合は、それぞれの経路利用に1カウントずつされるが、その利用者が複数回同じ経路を利用しても1カウントにしかない

※1時間に1回取得される位置情報ログを用いた経路判定のためカーナビの様な高精度の判定ではなく推定値

※属性ごとの割合は属性取得できたユーザーのみで集計



▼流入・流出時の利用交通経路の比率

1	国道135号	24.1%
2	東海道本線	17.7%
3	東海道新幹線	12.2%
4	伊豆急行	8.4%
5	国道1号	7.4%
6	伊東線	5.8%
7	東名高速	5.0%
8	伊豆箱根鉄道駿豆線	4.6%
9	県道21号	4.5%
10	御殿場線	3.4%
11	国道246号	2.3%
12	県道380号	1.8%
13	新東名高速	1.3%
14	県道22号	0.8%
15	県道87号	0.4%
16	ターンバイク箱根	0.2%
17	駿河湾フェリー	0.1%
18	湯河原パークウェイ	0.0%
総計		100.0%

交通手段に関する分析 伊豆半島全域

伊豆半島 7 市 6 町を訪れた観光客の交通手段は電車が約52%、自動車が約48%。
経路別では国道135号線が最も多く約24%。次いで東海道本線が約18%、東海道新幹線が約12%、伊豆急行が約8%、国道1号線が約7%となった。

▼流入・流出時の利用交通経路の比率

1	国道135号	24.1%
2	東海道本線	17.7%
3	東海道新幹線	12.2%
4	伊豆急行	8.4%
5	国道1号	7.4%
6	伊東線	5.8%
7	東名高速	5.0%
8	伊豆箱根鉄道駿豆線	4.6%
9	県道21号	4.5%
10	御殿場線	3.4%
11	国道246号	2.3%
12	県道380号	1.8%
13	新東名高速	1.3%
14	県道22号	0.8%
15	県道87号	0.4%
16	ターンバイク箱根	0.2%
17	駿河湾フェリー	0.1%
18	湯河原パークウェイ	0.0%
総計		100.0%

▼性年代別 経路の利用状況

	女性			男性		
	10歳～34歳	35歳～49歳	50歳以上	10歳～34歳	35歳～49歳	50歳以上
東海道新幹線	11.3%	5.9%	9.2%	11.3%	11.4%	8.4%
東海道本線	18.7%	14.3%	12.8%	22.2%	19.9%	15.9%
御殿場線	4.0%	2.5%	3.7%	4.1%	3.3%	1.9%
伊東線	6.4%	10.2%	11.0%	6.2%	8.5%	11.2%
伊豆急行	7.8%	11.5%	11.0%	6.7%	4.9%	7.5%
伊豆箱根鉄道駿豆線	5.3%	2.5%	5.5%	5.2%	4.1%	8.4%
東名高速	2.1%	2.2%	4.6%	2.1%	3.3%	2.8%
新東名高速	0.4%	0.3%	0.9%		1.2%	
国道1号	5.9%	9.0%	7.3%	5.2%	6.5%	14.0%
国道135号	28.2%	32.3%	29.4%	23.2%	25.2%	23.4%
国道246号	2.1%	1.9%	0.9%	1.0%	1.2%	0.9%
ターンバイク箱根	0.2%				0.8%	
県道21号	4.2%	4.0%	1.8%	8.2%	6.1%	1.9%
県道22号	0.9%	1.6%		1.0%	2.0%	0.9%
県道87号	0.9%		0.9%	0.5%	0.4%	2.8%
県道380号	1.5%	1.9%	0.9%	3.1%	1.2%	
駿河湾フェリー	0.2%					
総計	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%	100.0%

＜伊豆半島に訪れる観光客の4人に1人が通過する国道135号＞

伊豆半島に訪れる観光客のうち24.1%が通過する国道135号は、35歳～49歳の女性では32.3%まで高まり、伊豆半島来訪における主要な導線となっている。

よって、この導線上にある主要観光スポットや道の駅などを活用した伊豆半島の着地情報発信、各種キャンペーンの実施は有効であると思われる。

また、国道1号経由の流入を増やすことで、夏場を中心とした渋滞の緩和に繋がり、顧客満足度向上を図ることができる。

＜50歳以上比率が高い伊東線・伊豆急行・伊豆箱根鉄道駿豆線＞

既にこの導線は東海岸エリアや中伊豆エリアを移動する際の主要な導線であるが、若者の車離れが進む中、伊豆半島全体としてより重要な位置付けとなってくる。

立寄りに関する分析

目的地に到着する前後でどこに立ち寄ったか

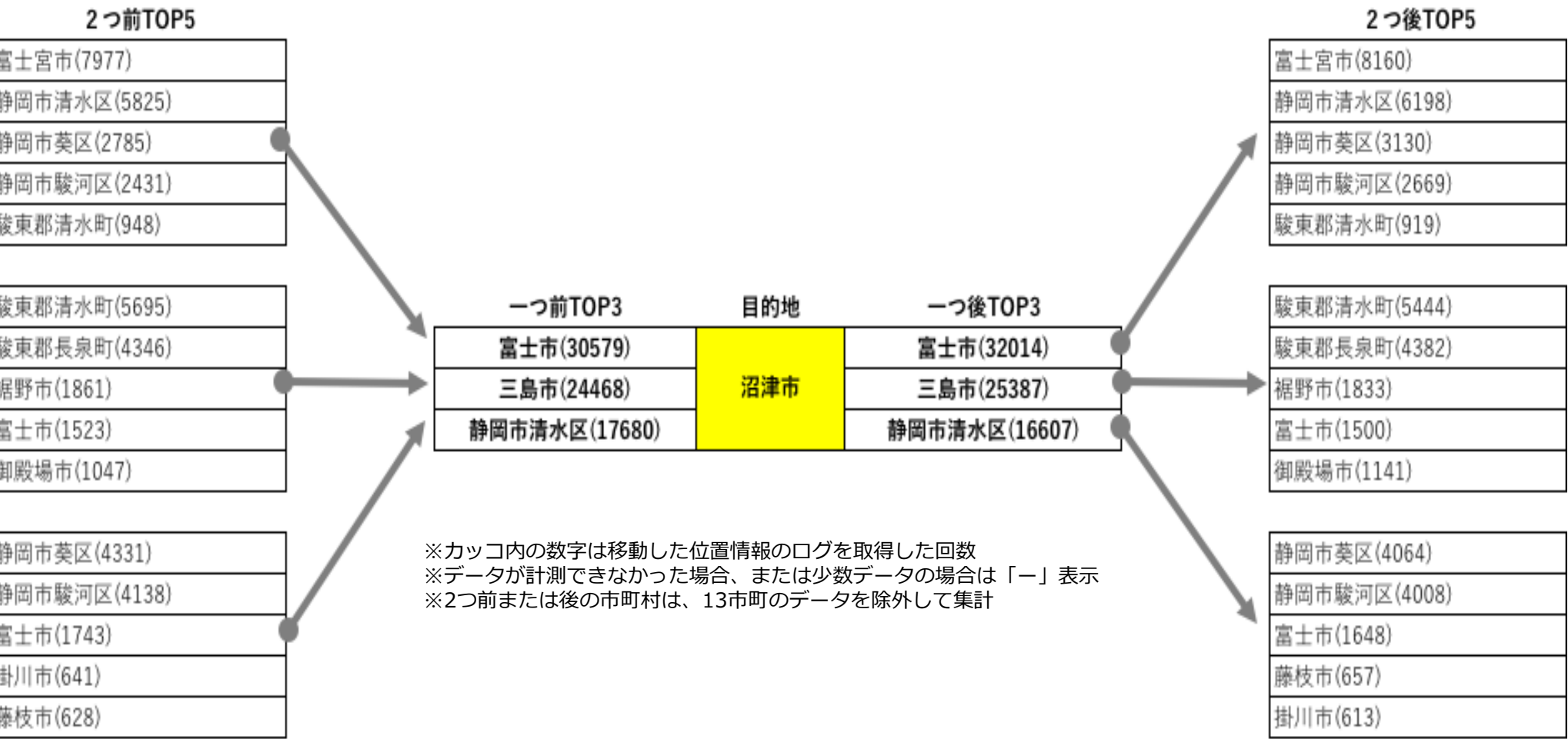
2016年1月1日～2016年12月31日まで、伊豆半島を訪れた国内に居住する観光客の目的地「前」または「後」に立ち寄った2か所の市区町村を分析します。

※継続して取得された位置情報のログ（通過を含む）が、別の市町に切り替わったタイミングを計測し、前後の立寄り市町を推定しています。

※1つ前の立寄り箇所はTOP3、2つ前はTOP5までの内訳を表示しています

※2つ前または後の市町村は、13市町のデータを除外して集計しています

立寄りに関する分析（沼津市 例）



＜地域への出入り導線に近い傾向が見られる＞

どの市町においても、地域へ至る経路、地域より出てからのログについて、近い傾向が見られる。交通導線上、伊豆半島への入り口と出口は絞られる傾向にはあるが、目的地への入り方と出方については異なる経路を促すことで、地域内周遊性は高まると思われる。

例えば、国道135号線経由で入られた旅行者が国道136号線経由で帰路について頂くだけでも、多様な観光資源に触れて頂く機会を作ることができる。

＜着地情報充実の為の立ち寄り周辺市町＞

小田原市、富士市、富士宮市、御殿場市、平塚市については伊豆半島域外において、通過立ち寄りのログが多く見受けられた。立ち寄り市町については、伊豆半島内に対する着地情報発信の観点で有効に活用できる。

周遊に関する分析

伊豆半島13市町間の周遊状況を把握

2016年1月1日～2016年12月31日まで、伊豆半島を訪れた国内に居住する観光客の周遊を分析します。13市町の中で、どの様に周遊しているのかを把握することができます。

※2つ以上の市町を訪れているユーザー（通過を含まない）を抽出し、全体を100%として集計します

※2つ以上訪れた市町は累計して集計しています

周遊に関する分析 伊豆半島 7 市 6 町（合計）

伊豆半島 7 市 6 町を訪れた観光客は三島市⇔沼津市、伊東市⇔熱海市を最も多く周遊しており、それぞれ全体の約10%。
次いで伊豆の国市⇔伊豆市の約7%、伊東市⇔伊豆市、伊豆の国市⇔三島市の約6%となった。

順位	ルート	訪問回数	割合
1	静岡県 三島市 ⇔ 静岡県 沼津市	17,993 回	10.2%
2	静岡県 伊東市 ⇔ 静岡県 熱海市	17,589 回	10.0%
3	静岡県 伊豆の国市 ⇔ 静岡県 伊豆市	11,713 回	6.7%
4	静岡県 伊東市 ⇔ 静岡県 伊豆市	9,836 回	5.6%
5	静岡県 伊豆の国市 ⇔ 静岡県 三島市	9,628 回	5.5%
6	静岡県 伊東市 ⇔ 静岡県 賀茂郡東伊豆町	8,991 回	5.1%
7	静岡県 伊豆市 ⇔ 静岡県 三島市	8,847 回	5.0%
8	静岡県 三島市 ⇔ 静岡県 熱海市	8,828 回	5.0%
9	静岡県 伊豆の国市 ⇔ 静岡県 沼津市	8,439 回	4.8%
10	静岡県 伊豆市 ⇔ 静岡県 沼津市	8,353 回	4.7%
11	静岡県 沼津市 ⇔ 静岡県 熱海市	8,134 回	4.6%
12	静岡県 伊東市 ⇔ 静岡県 伊豆の国市	7,714 回	4.4%
13	静岡県 三島市 ⇔ 静岡県 田方郡函南町	7,239 回	4.1%
14	静岡県 伊東市 ⇔ 静岡県 下田市	6,512 回	3.7%
15	静岡県 田方郡函南町 ⇔ 静岡県 熱海市	6,343 回	3.6%
16	静岡県 伊豆市 ⇔ 静岡県 下田市	6,310 回	3.6%
17	静岡県 伊豆市 ⇔ 静岡県 賀茂郡河津町	5,971 回	3.4%
18	静岡県 沼津市 ⇔ 静岡県 田方郡函南町	5,918 回	3.4%
19	静岡県 下田市 ⇔ 静岡県 賀茂郡河津町	5,907 回	3.4%
20	静岡県 伊豆市 ⇔ 静岡県 熱海市	5,670 回	3.2%

＜伊豆半島周遊のハブとなる伊豆市＞

伊豆市は、松崎町、西伊豆町、河津町、南伊豆町、下田市といった南部エリアや西伊豆エリアの市町からの高い周遊性を実現し、伊豆半島内周遊におけるハブ機能を有している。

一方で、伊豆市は北部エリアの沼津市や三島市との周遊性も高いことから、伊豆半島での滞在時間を延ばす為には、伊豆の入り口であるこの2市との連携が必要となる。

＜西伊豆エリアと伊豆東海岸エリアの連携＞

一方、伊東市も南伊豆、東伊豆の各町と高い周遊性を実現している。

今後の伊豆半島全体の周遊性向上の為には、伊東市と伊豆市の連携が不可欠である。

現段階でも伊東市来訪の32.9%は伊豆市へ、伊豆市来訪の40.7%は伊東市へ来訪しており、この連携を更に強化することで、西伊豆エリアと伊豆東海岸エリアの周遊性が高まり、滞在時間延長が実現する。

観光地の相関関係に関する分析

指定40観光スポットの重複利用状況

2016年1月1日～2016年12月31日まで、伊豆半島を訪れた国内に居住する観光客を対象に、あらかじめ指定した観光スポット間をどのように周遊したのかを分析します。1つの観光スポットを軸に分析し他のどの観光スポットにどのぐらいの割合で訪れたか分析します。

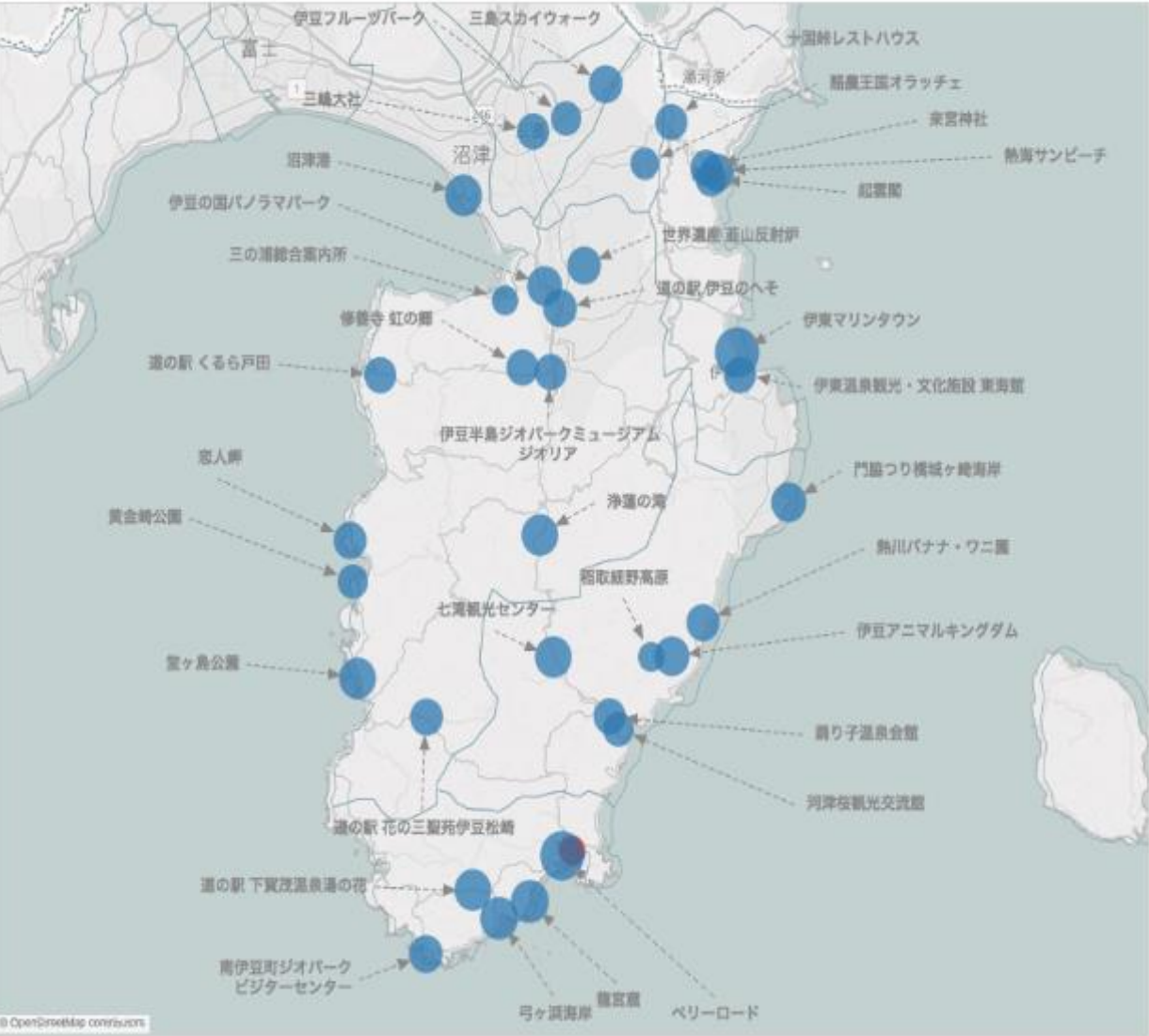
※2地点以上のスポットを訪れているユーザーのみを抽出し集計しています

※2地点以上訪れたスポットは累計して集計しています

観光地の来訪状況 伊豆半島7市6町 合計

道の駅伊東マリンタウンの来訪が最も多く約11%、次いで熱海サンビーチ、沼津港が約10%、来宮神社、三島スカイウォークが約6%となっている。

周遊地域（地図）



	順位	観光スポット	来訪率	来訪者数(人)
7市6町村	1	伊東マリンタウン（伊東市）	11.23%	4494
	2	熱海サンビーチ（熱海市）	10.25%	4102
	3	沼津港（沼津市）	9.99%	3999
	4	来宮神社（熱海市）	5.97%	2389
	5	三島スカイウォーク（三島市）	5.54%	2219
	6	伊豆の国パノラマパーク（伊豆の国市）	3.91%	1566
	7	起雲閣（熱海市）	3.88%	1552
	8	堂ヶ島公園（西伊豆町）	3.83%	1533
	9	東海館（伊東市）	3.52%	1407
	10	道の駅国下田みなと（下田市）	3.50%	1401
	11	韭山反射炉（伊豆の国市）	3.45%	1379
	12	伊豆アニマルキングダム（東伊豆町）	2.77%	1108
	13	城ヶ崎海岸（伊東市）	2.75%	1102
	14	道の駅 伊豆のへそ（伊豆の国市）	2.74%	1095
	15	三嶋大社（三島市）	2.55%	1019
	16	熱川バナナ・ワニ園（東伊豆町）	2.47%	989
	17	七滝観光センター（河津町）	2.28%	911
	18	浄蓮の滝（伊豆市）	2.00%	802
	19	ジオリア（美伊豆）	1.94%	776
	20	ベリーロード（下田市）	1.89%	756
	21	弓ヶ浜海岸（南伊豆町）	1.65%	662
	22	修善寺 虹の郷（伊豆市）	1.52%	609
	23	伊豆フルーツパーク（三島市）	1.48%	593
	24	十国峠レストハウス（函南町）	1.38%	554
	25	恋人岬（伊豆市）	1.05%	420
	26	龍宮窟（下田市）	0.93%	374
	27	道の駅 くるら戸田（沼津市）	0.87%	347
	28	道の駅 下賀茂温泉湯の花（南伊豆町）	0.78%	314
	29	酪農王国オラッチェ（函南町）	0.72%	289
	30	河津桜観光交流館（河津町）	0.46%	184
	31	黄金崎公園（西伊豆町）	0.43%	174
		南伊豆町ジオパークビジターセンター	0.43%	172
	33	道の駅 花の三聖苑伊豆松崎（松崎町）	0.42%	170
	34	踊り子温泉会館（河津町）	0.40%	161
	35	稲取細野高原（東伊豆町）	0.36%	144
	36	三の浦総合案内所（沼津市）	0.35%	141
	37	大田子海岸（西伊豆町）	0.13%	51
	38	かんなみ仏の里美術館（函南町）	0.10%	39
	39	伊豆の長八美術館（松崎町）	0.03%	12
		岩科学校（松崎町）	0.03%	12

＜道の駅伊東マリンタウンを中心とした東部と西部の連動＞

現状、道の駅伊東マリンタウンとの相関関係が強い観光地は伊豆東海岸に集中している。観光客数が最も多かった道の駅伊東マリンタウン（11.23%）をハブとし、伊豆の国パノラマパーク（3.91%）、堂ヶ島公園（3.83%）、韮山反射炉（3.45%）、道の駅伊豆のへそ（2.74%）などの中伊豆・西伊豆地区の観光スポットとの連携によって、伊豆半島の滞在時間を延ばすことができる。他にも2地点間、3地点間の相関性の高い地域については、今後のゴールデンルートとして磨き上げていくことが重要である。

＜三島スカイウォークが生まれたことでの新たな北部連携＞

北部では沼津港（9.99%）、来宮神社（5.97%）に加え、三島スカイウォーク（5.54%）が高い集客効果を示した。今後は2017年5月に道の駅伊豆ゲートウェイ函南がオープンすることで、同駅が道の駅伊東マリンタウンのように伊豆北部での高いハブ機能を持ち、観光客の流動が更に高まることが期待できる。沼津港については韮山反射炉、道の駅伊東マリンタウンへの強い相関関係を示しており、こちらも北部流入者の中伊豆、東海岸地区へのハブ機能を果たしていることが見られた。

旅程に関する分析

観光客が日帰り・宿泊（域内・域外）など
どのような旅行日程で来訪したか

2016年1月1日～2016年12月31日まで、伊豆半島を訪れた国内に居住する観光客の旅程を分析します。伊豆半島全域、および各13市町単位、属性別（性別・年代）で分析します。
※宿泊時間内にデータ取得がなかった場合は“宿泊地不明”とし、その宿泊回数は“域外宿泊”としてカウントします

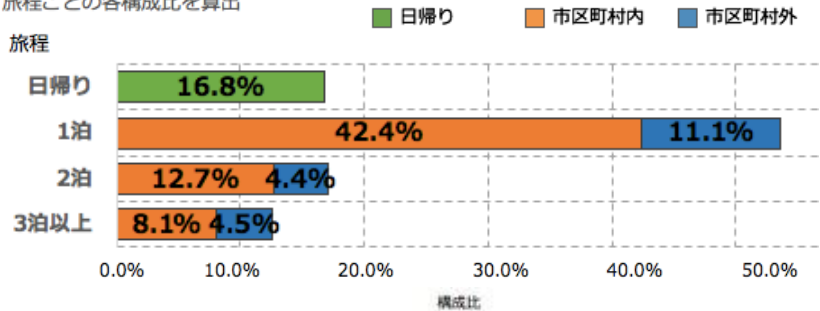
旅程分析 伊豆半島7市6町

伊豆半島を訪れた観光客の旅程は域内宿泊が約63%。約37%は日帰り、もしくは域外宿泊となっている。

なお、性年代別ではいずれも男女50歳以上が最も多い。

旅程分析（市区町村）

同じ市区町村内に泊まった宿泊を「市区町村内」、市区町村外に泊まった宿泊を「市区町村外」として旅程ごとの各構成比を算出



旅程	伊豆半島外	伊豆半島内	日帰り
日帰り			17,180回
1泊	11,377回	43,381回	
2泊	4,470回	12,966回	
3泊以上	4,574回	8,277回	

(単位：旅行回数)

性年代構成比(旅程・市区町村域内泊別：ウェイトバック)

来訪者の旅程別に性年代割合を算出

※性年代構成比は、属性（性別・年代）取得できたユーザーのみで集計

※データ件数の少ない地域は秘匿処理のため除外

※ウェイトバックは日本の人口構成比を参考にして推計

		女性 10歳～34歳	女性 35歳～49歳	女性 50歳以上	男性 10歳～34歳	男性 35歳～49歳	男性 50歳以上
日帰り	日帰り	10.8%	7.5%	24.5%	16.2%	11.1%	29.8%
1泊	伊豆半島外	16.8%	15.8%	26.5%	12.8%	11.7%	16.3%
	伊豆半島内	13.6%	10.5%	30.1%	12.9%	9.8%	23.2%
2泊	伊豆半島外	11.0%	12.6%	24.4%	13.3%	14.8%	23.8%
	伊豆半島内	14.9%	12.1%	29.3%	12.9%	10.3%	20.6%
3泊以上	伊豆半島外	9.0%	9.5%	24.4%	13.5%	14.0%	29.6%
	伊豆半島内	10.6%	11.8%	24.2%	13.5%	14.8%	25.0%

＜域内宿泊地域、日帰り・域外宿泊地域＞

域内宿泊が50%を超えたのは東伊豆町（56.7%）、熱海市（56.4%）、伊東市（56%）、松崎町（51.4%）であった。伊豆半島全域では、これらの市町を含む周遊ルートの効果的な設定により、エリア内の滞在時間をさらに延ばすことに繋げられる。

一案として東伊豆町から南下するルート、熱海市・伊東市から中伊豆へ向かうルート、松崎町を中心とした南西部のルート等が考えられる。

一方、日帰り・域外宿泊が最も多いのは沼津市（66.7%）。次いで三島市（69%）、函南町（64.6%）となった。

伊豆半島北部は東海道新幹線や東名高速道路、新東名高速道路が通り、アクセスが良いため沼津港、三島スカイウォークなど人気の観光スポットに立ち寄ったあと、観光客が域外に流出しているとみられる。

宿泊地に関する分析

観光客がその旅程中どこに宿泊したか（地域・都道府県・市町別）

2016年1月1日～2016年12月31日まで、伊豆半島を訪れた国内に居住する観光客がどこに宿泊したのか地域別、県別、市町別、属性別（性別・年代）に分析します。伊豆半島全域、および各13市町単位で分析します。

※時間内にデータ取得がなかった場合は“宿泊地不明”とします

※2泊以上の宿泊旅程者において1泊でも“宿泊地不明”があれば、全て“宿泊地不明”とカウントします

※伊豆半島エリアに一定時間滞在し宿泊した観光客を対象として分析します

※都道府県・市区町村別データは上位のみ表示となります

宿泊地分析（地域別）伊豆半島7市6町（合計）

伊豆半島7市6町を訪れた観光客は、東海エリアの宿泊が最も多く約69%。
次いで首都圏が約22%、近畿が約11%。性年代別ではいずれの地域とも男女50歳以上が最も多い。

宿泊地毎の来訪者数(地域別)

来訪者がどの地域に宿泊したのかを割合で算出

1	東海	66,964人
2	首都圏	24,734人
3	近畿	12,574人
4	甲信越・北陸	2,681人
5	中国	2,206人
6	北関東	1,824人
7	北海道・東北	1,336人
8	九州・沖縄	821人
9	四国	539人
のべ人数		113,679人

来訪者の宿泊地別構成比(地域別)

来訪者がどの地域に宿泊したのかを割合で算出



宿泊地毎の来訪者 性年代構成比(地域別：ウェイトバック)

来訪者がどの地域に泊まったのかを性年代割合で算出しております

		女性			男性		
		10歳~34歳	35歳~49歳	50歳以上	10歳~34歳	35歳~49歳	50歳以上
1	東海	13.7%	11.8%	31.8%	11.5%	9.7%	21.6%
2	首都圏	11.7%	10.4%	22.5%	16.1%	14.1%	25.3%
3	近畿	12.0%	11.3%	22.1%	15.9%	14.8%	23.9%
4	甲信越・北陸	39.6%	21.1%	-----	25.8%	13.5%	-----
5	中国	20.1%	10.7%	38.2%	10.1%	5.3%	15.6%
6	北関東	5.1%	3.9%	27.4%	10.4%	7.7%	45.6%
7	北海道・東北	4.3%	27.3%	27.0%	3.3%	21.0%	17.1%
8	九州・沖縄	4.0%	8.6%	12.8%	13.2%	27.6%	33.8%
9	四国	18.2%	9.7%	-----	47.4%	24.8%	-----

※性年代構成比は、属性（性別・年代）取得できたユーザーのみで集計

※データ件数の少ない地域は秘匿処理のため除外

※ウェイトバックは日本の人口構成比を参考にして推計

宿泊地分析(都道府県)伊豆半島7市6町(合計)

都道府県別では静岡県が最も多く約50%。次いで東京都が約12%、神奈川県が約7%。
性年代別では静岡県、東京都、神奈川県いずれも男女50歳以上が最も多い。

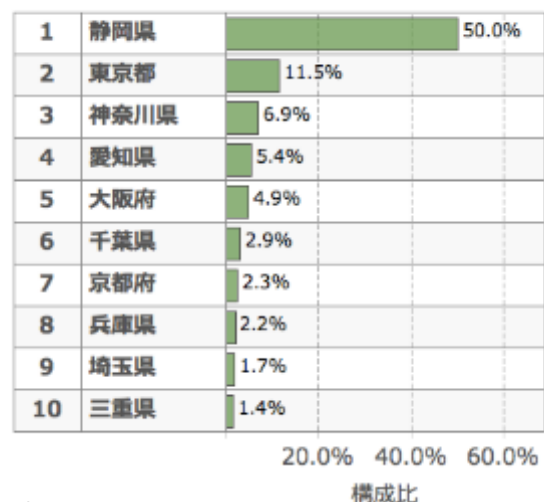
宿泊地毎の来訪者数(都道府県別)

来訪者がどの都道府県に宿泊したのかを割合で算出

1	静岡県	60,906人
2	東京都	14,013人
3	神奈川県	8,461人
4	愛知県	6,619人
5	大阪府	5,968人
6	千葉県	3,504人
7	京都府	2,814人
8	兵庫県	2,639人
9	埼玉県	2,114人
10	三重県	1,690人
のべ人数		121,821人

来訪者の宿泊地別構成比(都道府県別)

来訪者がどの都道府県に宿泊したのかを割合で算出



宿泊地毎の来訪者 性年代構成比(都道府県別：ウェイトバック)

来訪者がどの都道府県に宿泊したのかを性年代割合で算出しております

		女性			男性		
		10歳~34歳	35歳~49歳	50歳以上	10歳~34歳	35歳~49歳	50歳以上
1	静岡県	13.7%	11.8%	33.6%	10.6%	9.0%	21.2%
2	東京都	11.9%	10.6%	22.6%	16.1%	14.0%	24.8%
3	神奈川県	11.6%	9.3%	24.1%	15.8%	12.5%	26.7%
4	愛知県	13.5%	10.3%	20.5%	18.6%	14.0%	23.0%
5	大阪府	9.3%	8.0%	20.6%	17.1%	14.4%	30.7%
6	千葉県	13.0%	11.3%	20.0%	17.9%	15.3%	22.4%
7	京都府	20.2%	11.6%	27.5%	15.3%	8.6%	16.9%
8	兵庫県	8.1%	14.5%	11.5%	16.9%	29.5%	19.4%
9	埼玉県	6.1%	7.0%	19.3%	14.3%	16.3%	37.0%
10	三重県	19.4%	41.5%	-----	12.6%	26.4%	-----

※TOP11以下：13,093人 / 10.7%

※性年代構成比は、属性（性別・年代）取得できたユーザーのみで集計

※データ件数の少ない地域は秘匿処理のため除外

※ウェイトバックは日本の人口構成比を参考にして推計

宿泊地分析（市区町村）伊豆半島7市6町（合計）

市区町村別では伊東市、熱海市が最も多く約10%。次いで沼津市が約5%、伊豆市が約4%、東伊豆町が約3%となっている。なお、伊豆半島エリア全体では約45%となっている。

宿泊地毎の来訪者数(市区町村別)

来訪した人がどの市区町村に宿泊したのかを算出

1	静岡県 伊東市	13,536人
2	静岡県 熱海市	12,535人
3	静岡県 沼津市	6,164人
4	静岡県 伊豆市	5,254人
5	静岡県 賀茂郡東伊豆町	4,260人
6	静岡県 下田市	3,806人
7	静岡県 伊豆の国市	3,669人
8	静岡県 三島市	3,125人
9	静岡県 賀茂郡南伊豆町	1,699人
10	東京都 港区	1,673人
11	愛知県 名古屋市中区	1,633人
12	静岡県 賀茂郡河津町	1,366人
13	静岡県 賀茂郡西伊豆町	1,337人
14	東京都 千代田区	1,304人
15	神奈川県 足柄下郡箱根町	1,279人
16	東京都 中央区	1,278人
17	千葉県 浦安市	1,219人
18	静岡県 賀茂郡松崎町	1,080人
19	大阪府 大阪市中央区	1,045人
20	静岡県 田方郡函南町	1,022人
のべ人数		130,330人

来訪者の宿泊地別構成比(都道府県別)

選択した市区町村に来訪した人がどの都道府県に宿泊したのかを割合で算出



※TOP21以下：62,046人 / 47.6%

＜宿泊が旅の目的になっている伊豆半島＞

今回の調査で、伊豆半島域内に宿泊した観光客は約45%となっている。なお伊東市（10.4%）、熱海市（9.6%）に多く宿泊しており、この2市で全体の2割を占めることがわかった。また、13市町に共通していたことは訪れた市町に宿泊している割合が最も多いが、次いで宿泊が多い市町は隣接する市町であった。近隣に箱根町という日本を代表する温泉地がある中、伊豆半島来訪者は箱根町にほぼ宿泊をしていない。宿泊地としての優位性を示す結果となっている。なお、伊豆半島北部の市町で東京、名古屋、大阪、千葉などが散見されるのは東海道新幹線や東名高速道路、新東名高速道路のインターチェンジ等に近いため旅行中に立ち寄られ、域外の宿泊施設に泊まっていると考えられる。

＜旅行者を呼び込めれば宿泊に結びつける可能性が高い伊東市と東伊豆町＞

来訪者の宿泊地のうち、当該市町が高い割合で選ばれているところは伊東市（57.8%）、東伊豆町（52%）である。次いで、下田市（46.1%）、松崎町（44.5%）、南伊豆町（42.2%）となっている。これらの市町は旅行者を呼び込めば宿泊につながる可能性が高いため、伊豆半島全域においては、これらの市町を含む周遊ルートの効果的な設定により、エリア内の滞在時間をさらに延ばすことに繋げられる。

季節・曜日に関する分析

季節・曜日毎に来客数や滞在時間に変化があるか

2016年1月1日～2016年12月31日まで、伊豆半島（伊豆半島全域、および各13市町単位）を訪れた国内に居住する観光客について、季節および曜日（平日、休日：土日・祝祭日）別に傾向を分析します。伊豆半島全域、および各13市町単位で分析します。

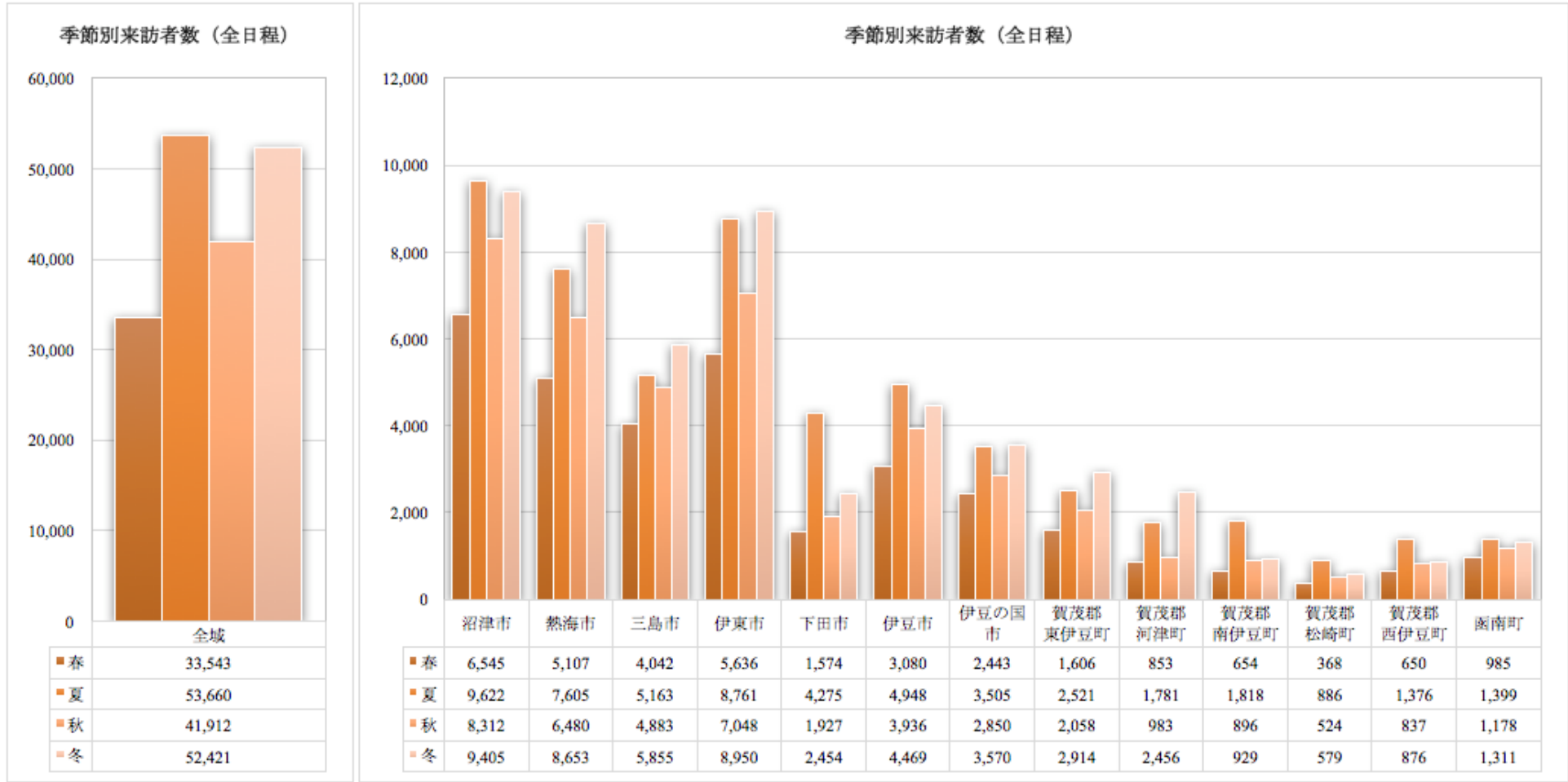
※季節定義（気象庁の定義より）

＜春＞ 3月～5月 ＜夏＞ 6月～8月 ＜秋＞ 9月～11月 ＜冬＞ 12月～2月

※単位は人（のべ人数）

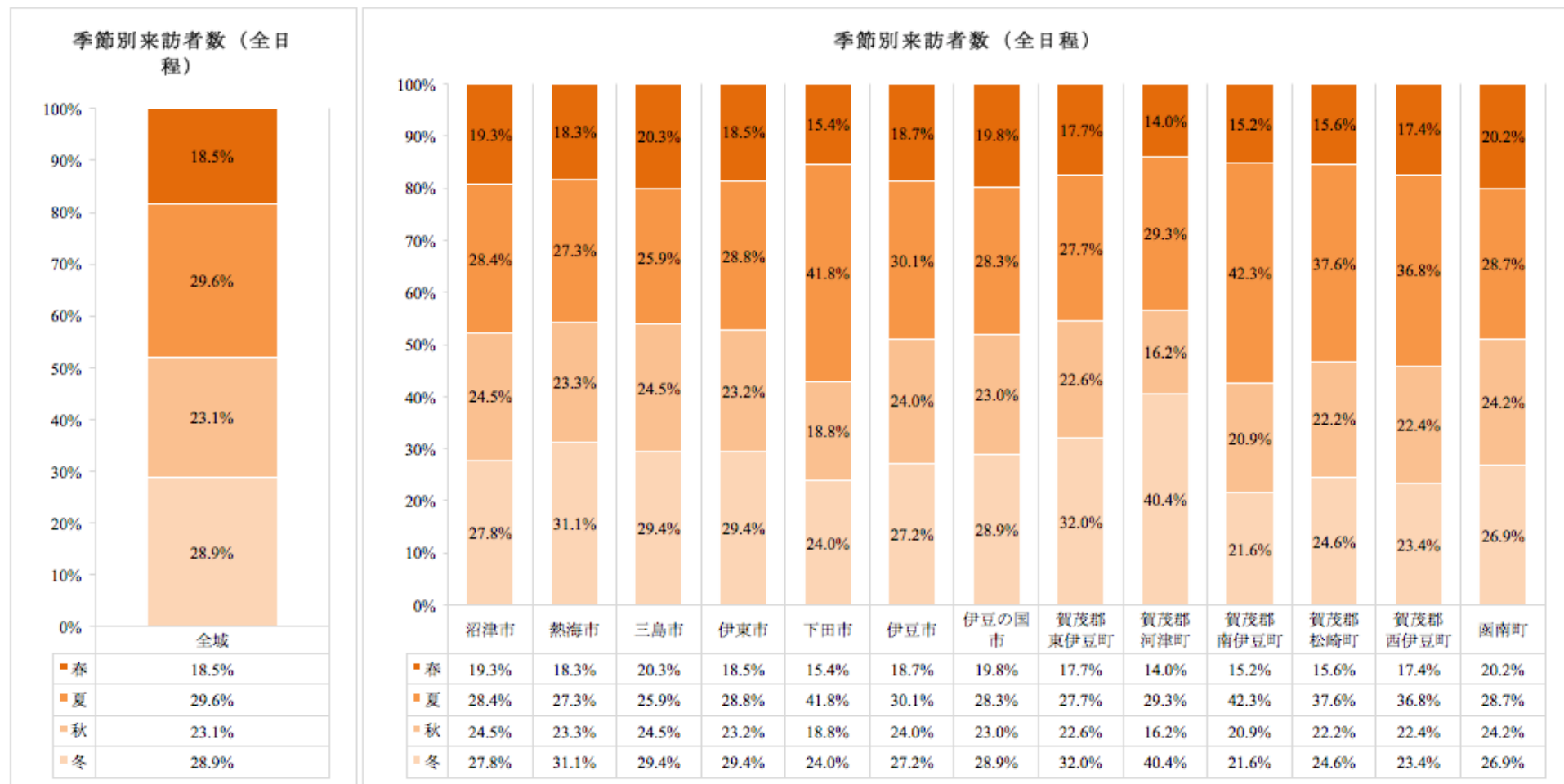
季節曜日に関する分析（全日程）

伊豆半島 7 市 6 町を訪れた観光客は、全日程で夏期が最も多く約30%。次いで冬期が約29%、秋期が約23%、春期が約19%となった。



季節曜日に関する分析（全日程） 構成比

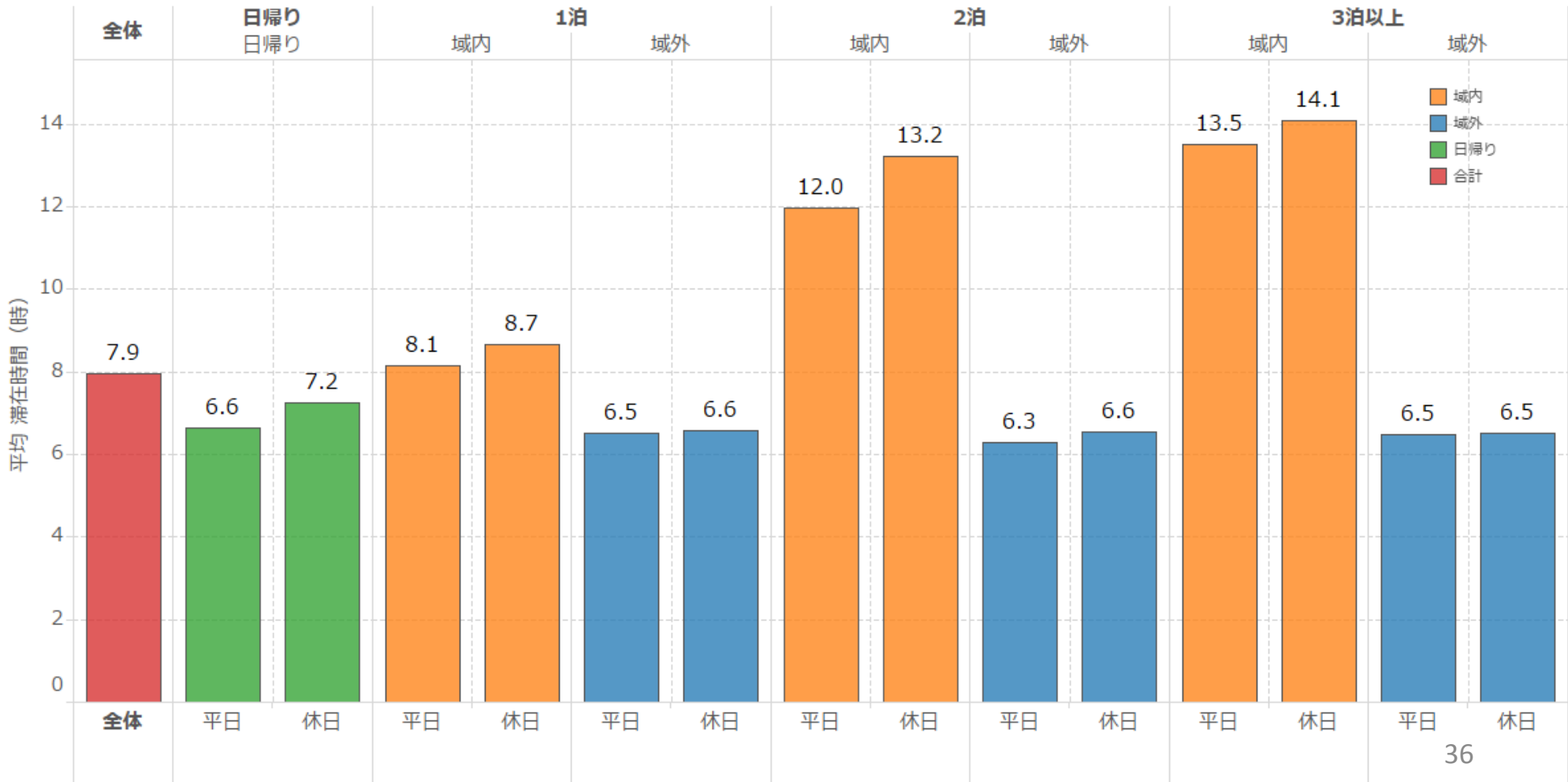
夏期の割合が最も高いのは南伊豆町、下田市で約42%。次いで松崎町の約38%、西伊豆町の約37%。一方、冬期は河津町が約40%で最も高い。なお、夏期より冬期の割合が高いのは河津町、東伊豆町、熱海市、三島市、伊豆の国市、伊東市の4市2町。



季節曜日に関する分析（旅程×平日・休日） 伊豆半島 7 市 6 町

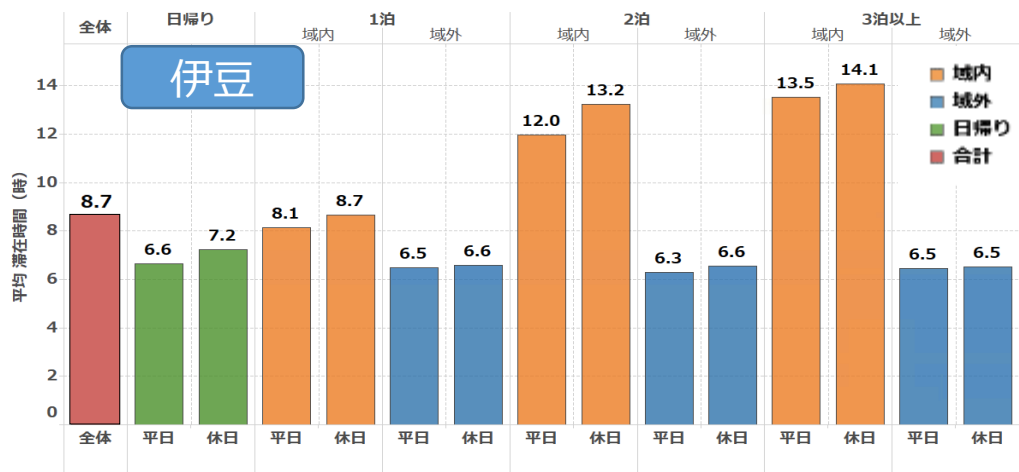
伊豆半島 7 市 6 町を訪れた観光客の平均滞在時間は、域内宿泊の 3 泊以上が最も長く14.1時間。日帰りを除き、域内泊においてはいずれも休日の滞在時間が最も長かった。

旅程・カレンダー別 平均滞在時間
来訪者の旅程・カレンダー別で平均滞在時間を集計しております

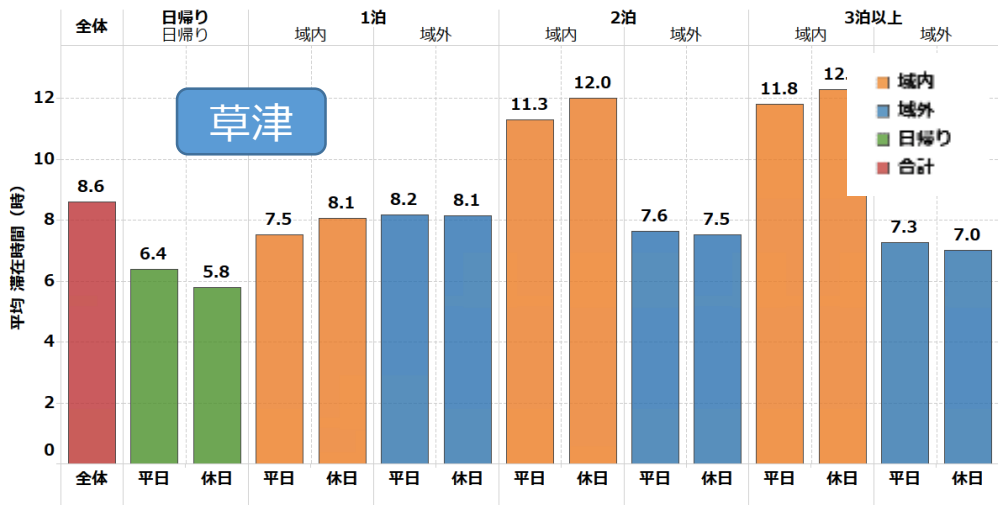
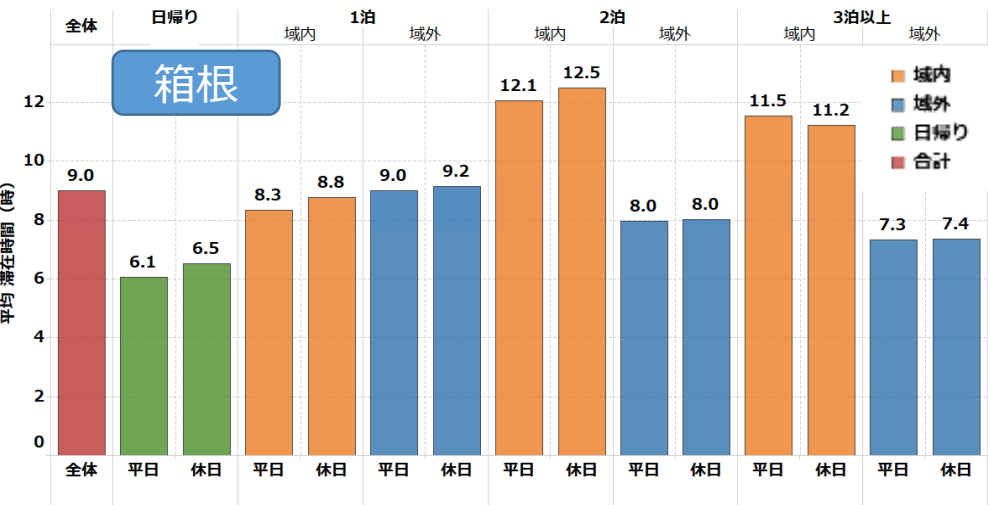


季節曜日に関する分析（旅程×平日・休日） 箱根、草津との比較

観光客の平均滞在時間について域内宿泊で比較した場合、箱根10.7時間、草津10.5時間、伊豆は11.6時間で3エリア中、最も長かった。一方、域外泊で比較した場合、箱根8.2時間、草津10.5時間、伊豆は6.5時間であり、箱根と草津は域外泊の滞在時間が全体を押し上げていることがわかる。伊豆の場合、半島という立地を考えると、域内泊の滞在時間を延ばすことが全体の押し上げに繋がるので、その為に市町の連携を深め周遊を更に促進させることが必要と考えられる。

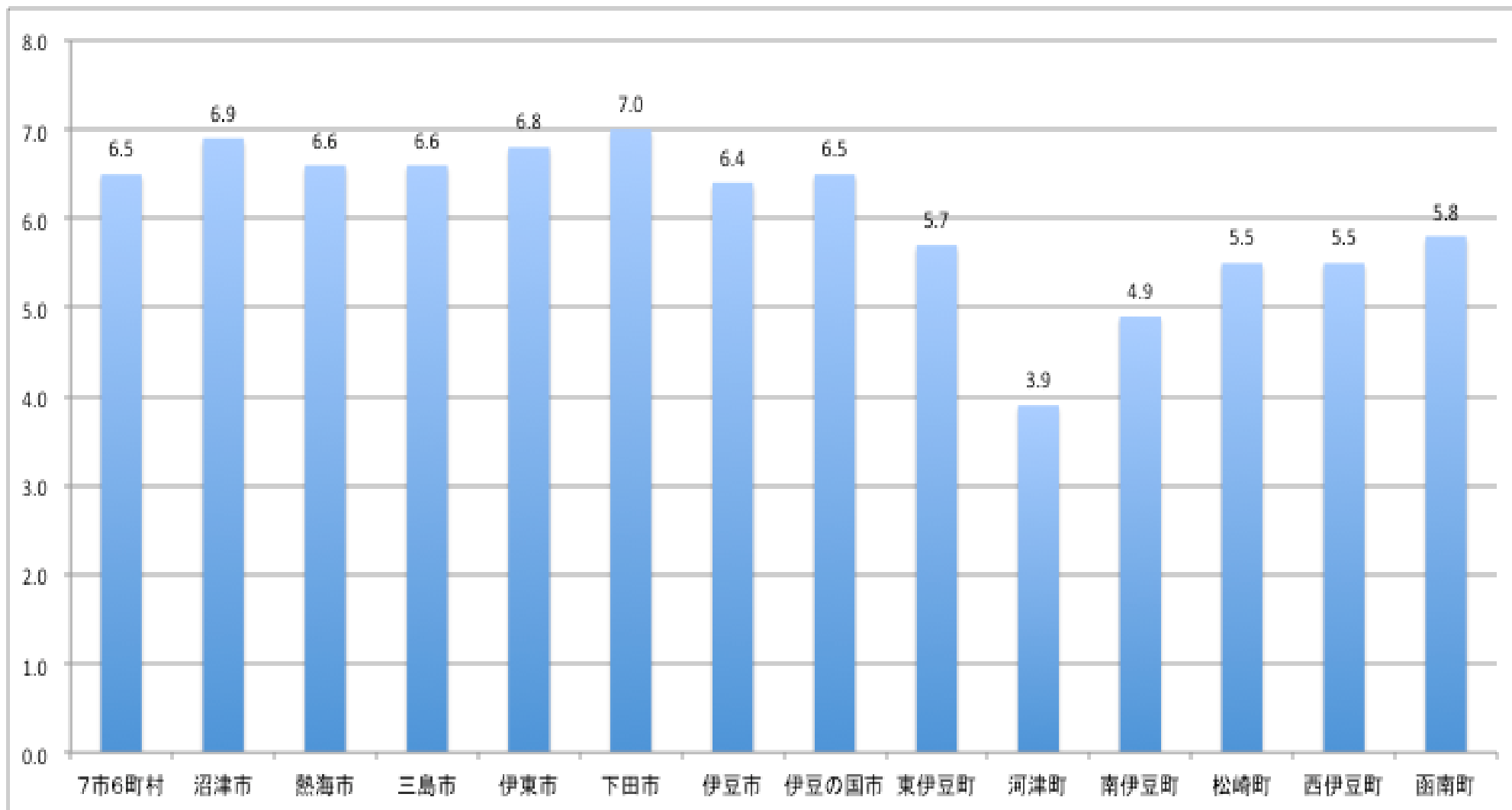


旅程・カレンダー別
平均滞在時間
来訪者の旅程・カレンダー別で
平均滞在時間を集計しております



観光地に関する分析 平均滞在時間

最も滞在時間が長いのは下田市の7.0時間。次いで沼津市の6.9時間、伊東市の6.8時間とつづく。一方、最も短いのは河津町の3.9時間。立ち寄りが多く、他のエリアに流出している可能性がある。



※分析対象者は15分以上の滞在者とする

＜季節毎の集客が安定している沼津市、三島市、熱海市、函南町の活用＞

伊豆半島全体として、北部の4市町は各季節とも安定した集客を実現している。

そこで、夏期に偏る下田市や南伊豆町、冬期に偏る河津町のように季節変動性が大きい市町に対し、相対的に季節変動性の低い北部の市町が伊豆半島の入り口として、滞在ストーリーの起点となることが重要と考えられる。

＜リピーターになることで延びる滞在時間＞

伊豆半島域内での連泊、転泊が増えることで滞在時間延長につながると同時に、箱根や草津より広域な伊豆半島の魅力がより一層伝わる。

また、リピーター化を図ることが周遊性拡大につながるため季節性を持った魅力発信、来訪者満足度向上が鍵となる。

なお、日帰りと域外宿泊は、ほぼ滞在時間の差が見られない。域外宿泊は他のエリアに宿泊施設があるため、日帰りと同じ旅程動向になると推測される。

考察

事実と仮説、打ち手について

■ 今回の調査で明らかになった事実は主に7つ

- 東京都南西部に向けた戦略的アプローチの必要性
- 立寄りエリア「小田原市」「富士市」「富士宮市」「御殿場市」との相互連携
- 来訪率、周遊性を高める観光資源の整理
- 幹線道路沿線の「道の駅」を活用した流入経路の整理
- 伊豆半島内周遊のハブとなる伊東市と伊豆市の連携
- 強い相関関係を示した地域を結ぶゴールデンルートの整備
- 季節変動性の低い北部エリアと偏りがある南部エリアとの連携

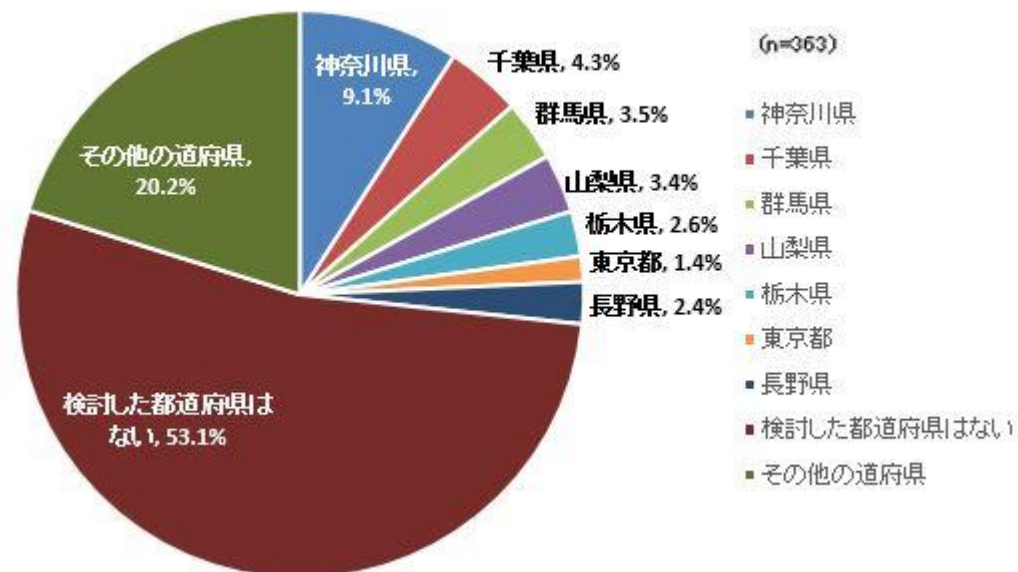
次ページから事実に基づいた仮説立てを行い、誘客促進事業の立案に資する提案を提示します。

■調査から明らかになった事実に基づく仮説、提案

➤ 東京都南西部に向けた戦略的アプローチの必要性

伊豆半島への来訪発地を見ると首都圏でも南部、西部に主要発地が集中している。同地域において移動の距離と時間を考えると南部であれば房総半島、西部であれば山梨県・長野県と比較検討をされることが想定される。また、隣接する箱根町も比較検討をされる地域である。伊豆半島において房総半島よりも強い地域資源は温泉である（43ページのじゃらん人気温泉地ランキングを参照）。一方、山梨県や長野県、箱根町にない魅力は海・新鮮な海の幸が考えられる。この2つの地域資源を前面に世田谷区、大田区、練馬区、江東区、杉並区、品川区での私鉄、地下鉄、J R各線の交通広告の露出は効果的と考えられる。

伊豆半島の他に旅行先を検討した都道府県



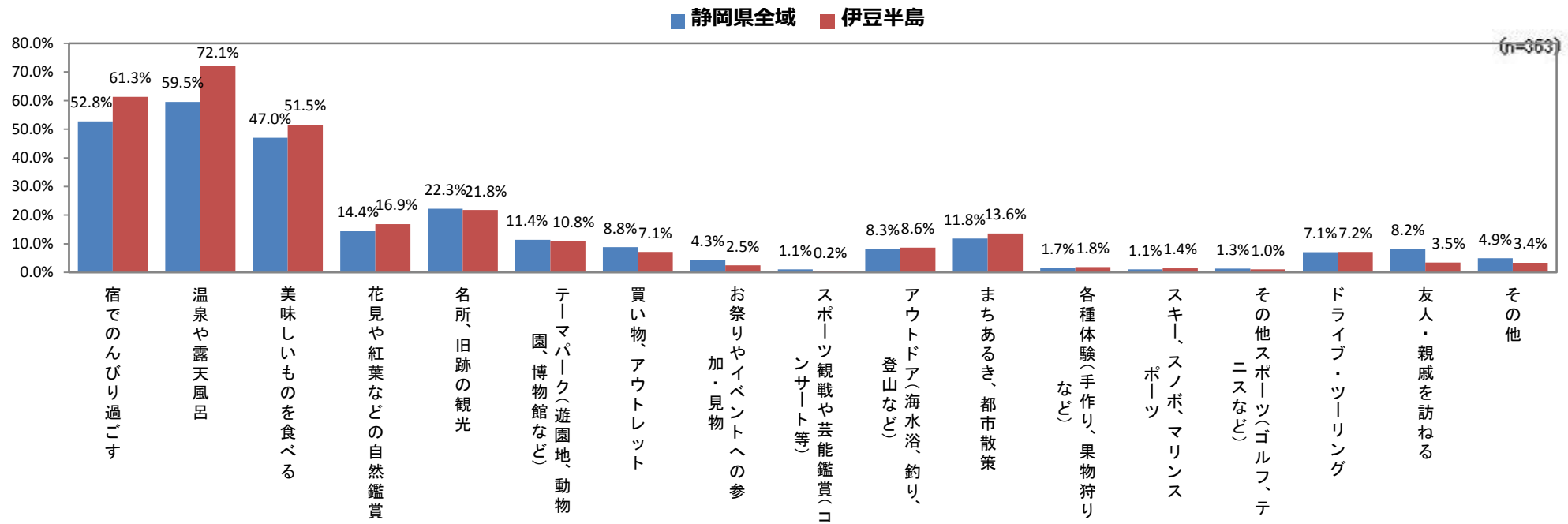
■調査から明らかになった事実に基づく仮説、提案

➤ 東京都南西部に向けた戦略的アプローチの必要性

じゃらん宿泊旅行調査（2016年）によると、伊豆半島への旅の目的として最も多いのは「温泉」、次いで「宿でのんびり過ごす」「美味しいものを食べる」がつづく。

伊豆半島への誘客を図るプロモーションを行う際には、これら競合地域との差別化を発地と合わせて考えていく必要がある。

伊豆半島旅行者の旅の目的



出典：じゃらん宿泊旅行調査2016

(参考資料) じゃらん人気温泉地ランキング2016

もう一度行ってみたい温泉地	
1	【関東甲信越／神奈川】 箱根温泉
2	【関東甲信越／群馬】 草津温泉
3	【東海／静岡】 熱海温泉
4	【関東甲信越／栃木】 鬼怒川温泉
5	【関東甲信越／群馬】 万座温泉
6	【関東甲信越／群馬】 伊香保温泉
7	【関東甲信越／長野】 白骨温泉
8	【関東甲信越／栃木】 那須温泉
9	【関東甲信越／神奈川】 湯河原温泉
10	【関東甲信越／栃木】 日光湯元温泉
11	【関東甲信越／群馬】 四万温泉
12	【関東甲信越／群馬】 みなかみ18湯（旧水上温泉郷・猿ヶ京温泉・法師温泉・宝川温泉）
13	【東海／静岡】 修善寺温泉
14	【関東甲信越／長野】 野沢温泉
15	【東海／静岡】 伊東温泉・宇佐美温泉
16	【東海／静岡】 土肥温泉
17	【関東甲信越／栃木】 湯西川温泉
18	【東海／静岡】 下田温泉
19	【関東甲信越／山梨】 石和温泉
19	【東海／静岡】 稲取温泉

関東・甲信越・静岡県エリア居住者が選ぶ、関東・甲信越・静岡県エリアの「もう一度行ってみたい温泉地」

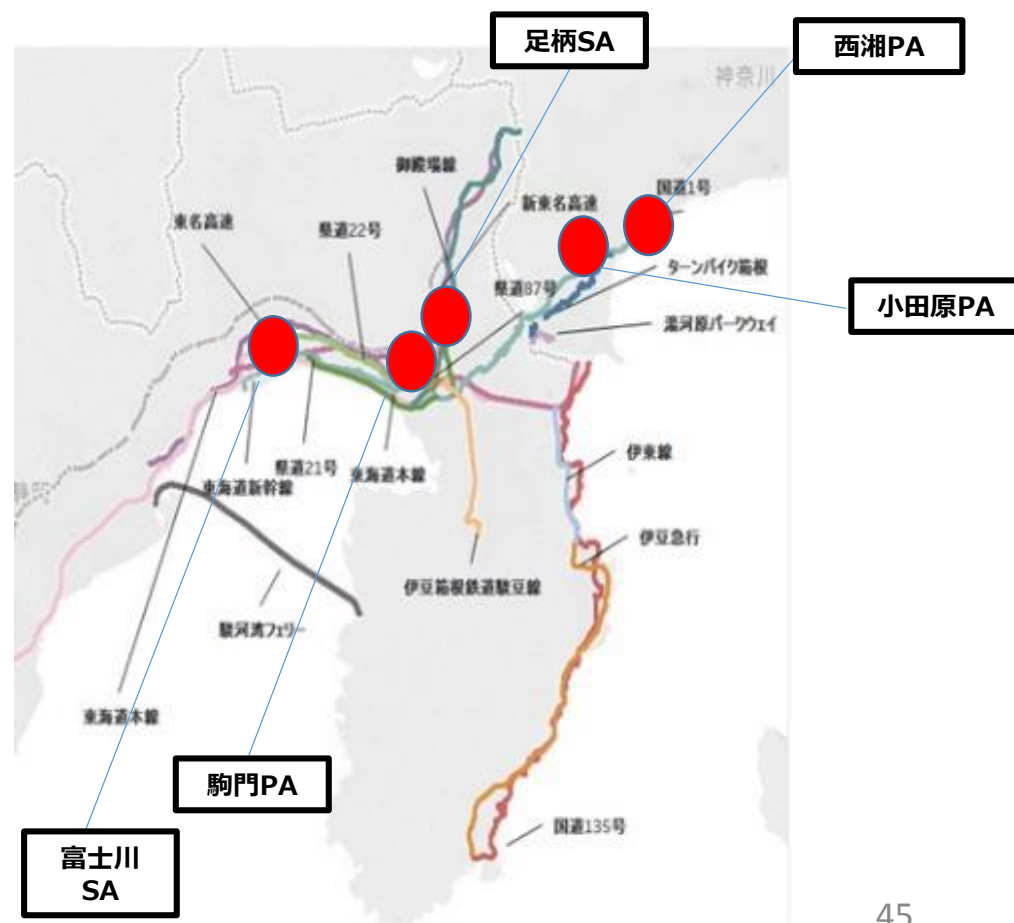
※じゃらんリサーチセンター 2016年12月発表

■調査から明らかになった事実に基づく仮説、提案

➤ 立ち寄りエリア「小田原市」「富士市」「富士宮市」「御殿場市」の相互連携

小田原市、富士市、富士宮市、御殿場市、平塚市については伊豆半島域外において、通過立ち寄りのログが多く見受けられた。立ち寄り市町については、伊豆半島内に対する着地情報発信の観点で有効に活用できる。今後の施策としてサービスエリアやパーキングエリアがある「小田原市」「富士市」「御殿場市」とは相互連携のもと、パンフレットを配布し合うなども考えられる。

小田原市	小田原厚木道路 小田原パーキングエリア（下り線）
	西湘バイパス 西湘パーキングエリア（下り線）
御殿場市	東名高速道路 EXPASA足柄（下り線）
御殿場市	東名高速道路 駒門パーキングエリア（下り線）
富士市	東名高速道路 富士川サービスエリア（上り線）



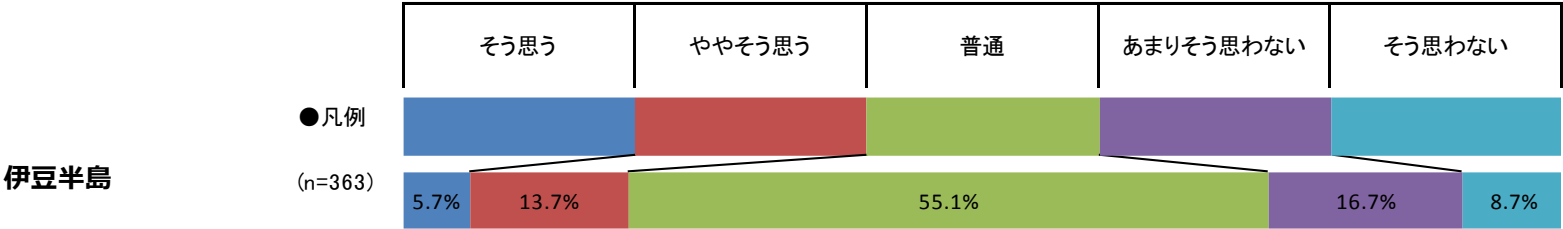
■ 調査から明らかになった事実に基づく仮説、提案

➤ 来訪率、周遊性を高める観光資源の整理

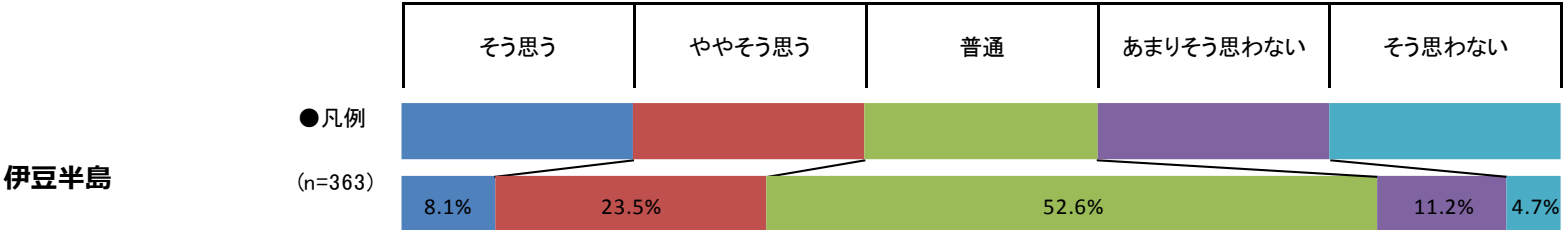
来訪発地毎にややばらつきはあるものの、今回の調査では50歳以上の観光客が多く来訪していることがわかった。この層に繰り返し来訪してもらうには「食」「自然」など、地域資源の整理が改めて重要である。一方、比較的来訪比率の低い「若者」という新規カスタマーの掘り起しには、二次交通の整備等を合わせた新しい旅の提案が早急に求められる。じゃらん宿泊旅行調査（2016年）では若者が楽しめるスポット、大人が楽しめるスポットとも満足度は「普通」が最も多かった。リピーターを増やすには、来訪者がどの地域資源に対し満足しているか、整理が必要である。

伊豆半島旅行後の来訪者の満足度

若者が楽しめるスポットや施設・体験が多かった



大人が楽しめるスポットや施設・体験が多かった



出典：じゃらん宿泊旅行調査2016

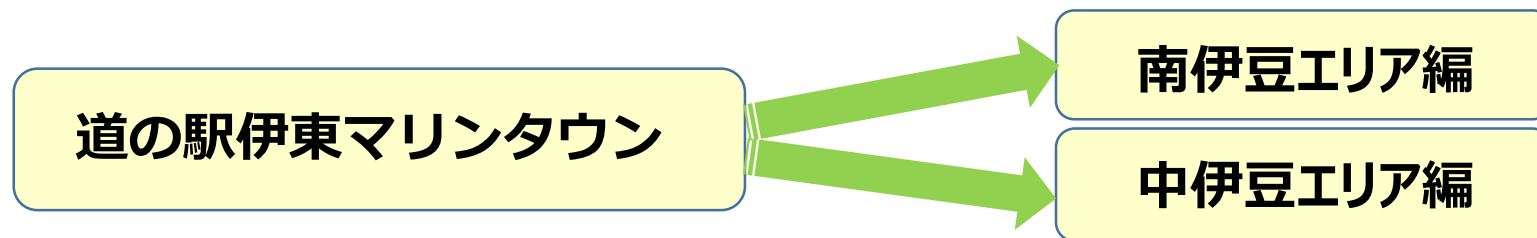
■調査から明らかになった事実に基づく仮説、提案

➤ 幹線道路沿線の「道の駅」を活用した流入経路の整理

伊豆半島を訪れる観光客のうち24.1%が利用する国道135号は、35歳～49歳の女性では32.3%まで高まり、伊豆観光における主要な導線となっている。

一方、観光地の来訪状況で最も多くの観光客が訪れている道の駅伊東マリンタウンは、国道135号を車で南下する観光客にとって、伊豆と一番最初に接点をもつスポットと言え、この道の駅での伊豆半島の着地情報発信及び更に南部へと誘うキャンペーンの実施は有効であると思われる。

この、道の駅伊東マリンタウンでの着地情報発信やキャンペーンの実施は、周遊に関する分析を踏まえると、国道135号を更に南下するルートと県道19号伊東大仁線を西に進むルートの2方面に分けた情報発信が観光客の動向に即している。周遊を喚起するにはこの幹線道路沿線の道の駅を活用した、流入経路を整理した上で、各資源の磨き上げを行っていくことが有効であり、じゃらん宿泊旅行調査の「旅の目的」から考察すると下記のように考えられる。



なお、今回は調査できなかったが、2017年5月にオープンする道の駅伊豆ゲートウェイ函南についても同じことが言えるのではないだろうか。

東名・新東名高速道路と直結する伊豆縦貫道や伊豆を南北に通る国道136号に程近く、文字通り伊豆の玄関口に位置する同駅を中心に、道の駅伊東マリンタウンと同じような取り組みを試みることで、特に中伊豆エリアや西伊豆エリアへの回遊性は更に高まっていくだろう。

■調査から明らかになった事実に基づく仮説、提案

➤ 強い相関関係を示した地域を結ぶゴールデンルートの整備

現状、道の駅伊東マリンタウンとの相関関係が強い観光地は伊豆東海岸に集中している。観光客数が最も多かった道の駅伊東マリンタウン（11.23%）をハブとし、伊豆の国パノラマパーク（3.91%）、堂ヶ島公園（3.83%）、韮山反射炉（3.45%）、道の駅伊豆のへそ（2.74%）などの中伊豆・西伊豆地区の観光スポットとの連携によって、伊豆半島の滞在時間を延ばすことができる。他にも2地点間、3地点間の相関性の高い地域については、今後のゴールデンルートとして磨き上げていくことが重要である。

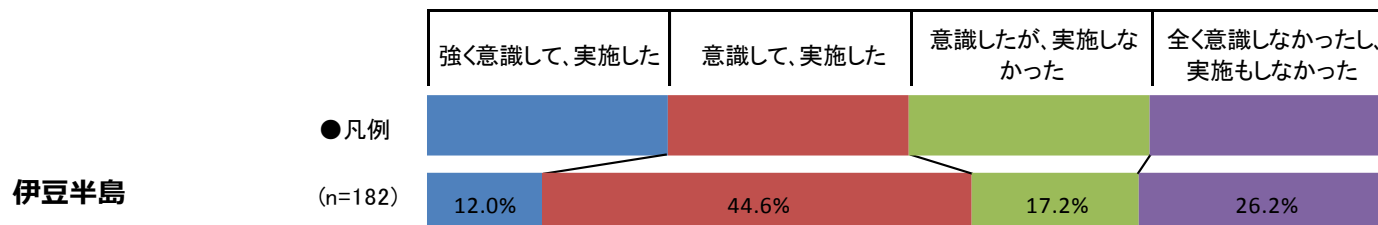
一方で、道の駅伊東マリンタウンのほかに沼津港、堂ヶ島公園、三島スカイウォーク、道の駅開国下田みなとは他のエリアとの相関関係で出現率が高く、伊豆半島の周遊性を高める上で重要な観光地と言える。

なお、熱海市の3つの観光地はすべて熱海市内で完結していることが特徴的であった。

伊豆半島旅行者が旅行前や旅行中に意識したこと

事前（出発前）に立ち寄り先などの計画をたてる

出典：じゃらん宿泊旅行調査2016



じゃらん宿泊旅行調査では伊豆半島旅行者のうち、約43%が事前に立ち寄り先の計画を立てていない、または実行できなかったと回答している。この層を着地情報で周遊させていく仕組みが重要である。

■ 調査から明らかになった事実に基づく仮説、提案

➤ 伊豆半島内周遊のハブとなる伊豆市と伊東市の連携

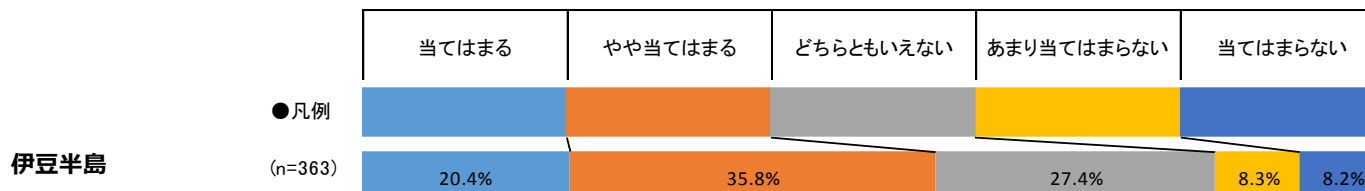
伊豆市は、松崎町、西伊豆町、河津町、南伊豆町、下田市といった南部エリアや西伊豆エリアの市町からの高い周遊性を実現し、伊豆半島内周遊におけるハブ機能を有している。伊豆市を訪れた観光客の交通手段は電車が約46%、自動車が約54%。伊豆市からさらに西部、南部の周遊性を実現するには電車利用の観光客に対する二次交通が課題となる。旅は動機と交通手段で行き先が決まるため、二次交通の整備とともに動機となる地域資源を整理。相関性の強い市町が連携した「旅のストーリー」を、ターゲットに発信すれば周遊性が高まる。

伊東市は南伊豆、東伊豆の各市町と高い周遊性を実現している。今後の伊豆半島全体の周遊性向上の為には、伊東市と伊豆市の連携が不可欠である。現段階でも伊東市来訪の32.9%は伊豆市へ、伊豆市来訪の40.7%は伊東市へ来訪している。この連携を強化することで、伊豆半島西部と東部の周遊性が高まり、滞在時間延長が実現する。

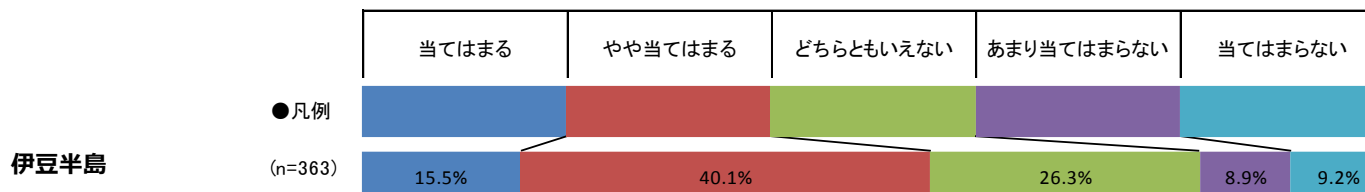
伊豆半島旅行者が旅先を選んだ理由

特定の観光地・観光スポットに興味があったから

出典：じゃらん宿泊旅行調査2016



交通の便が良かったから



■調査から明らかになった事実に基づく仮説、提案

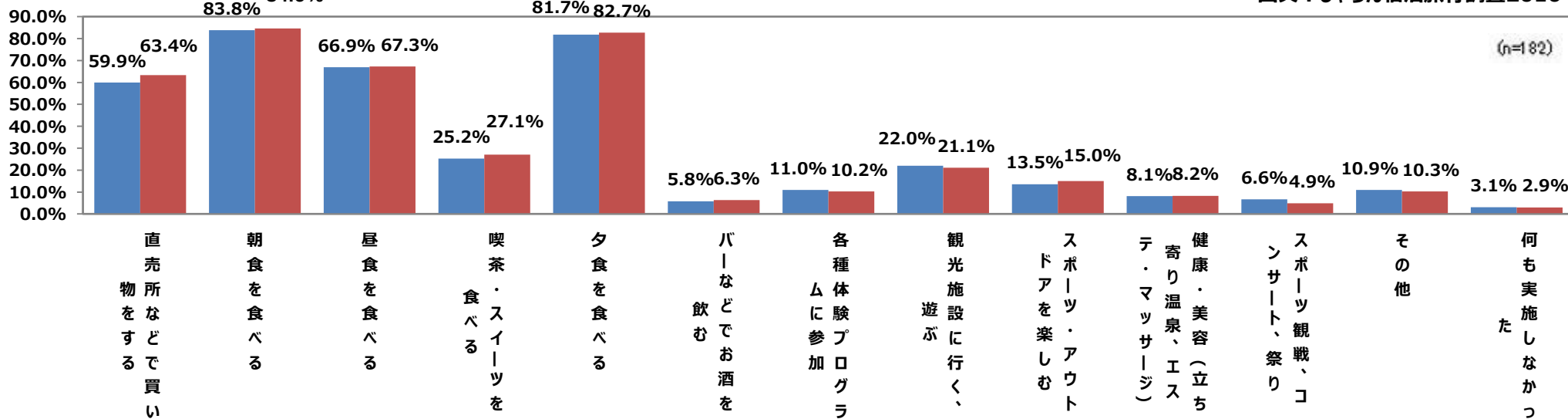
➤ 季節変動性の低い北部エリアと偏りがある南部エリアとの連携

伊豆半島全体として、北部の4市町は各季節とも安定した集客を実現している。そこで、夏期に偏る下田市や南伊豆町、冬期に偏る河津町のように季節変動性が大きい市町に対し、相対的に季節変動性の低い北部の市町が伊豆半島の入り口として、滞在ストーリーの起点となることが重要と考えられる。

伊豆半島旅行者が主目的地で行ったこと

■ 静岡県全域 ■ 伊豆半島

出典：じゃらん宿泊旅行調査2016



じゃらん宿泊旅行調査では、宿泊施設以外で行った行動として「昼食を食べる」「直売所などで買い物をする」が多い。旅のストーリーの例として、伊豆東海岸エリアで朝日を見たあと朝市に出かけ、中伊豆エリアに移動し昼食を食べ、夕陽の見える西伊豆エリアで夕食を食べるなど、東海岸エリアから西伊豆エリアを横断するストーリーは、通年でアピールできる「伊豆ならではの滞在ストーリー」と言える。

誘客推進事業の 立案に資する提案

＜提案 1＞ 若年層×電車・バス。南西部を周遊する企画

課題：伊豆半島南西部（下田市、南伊豆町、松崎町）の季節変動が激しい

打ち手：若年層にしばった二次交通のフリーパス造成、お湯マジの参画

ターゲット：電車で来訪する東京都、神奈川県、静岡県の若年層

時期：12～3月

企画内容

三島市、沼津市は伊豆半島で季節変動が最も小さいエリア。

また、10～34歳の男性42.9%、女性39.3%が電車（新幹線、東海道線、伊豆箱根鉄道駿豆線、御殿場線）を利用し、50歳以上より割合が高い。

三島市、沼津市から伊豆半島南西部を周遊するにはレンタカー、もしくは路線バスの利用が必須。今回の調査結果を踏まえ、動機と交通手段が整った伊豆半島南西部を周遊する旅のストーリーを造成する。

若年層にしばったバスのフリーパスを新たに造成し、旅行費用のコストパフォーマンスをアピールする。じゃらん宿泊旅行調査では旅の動機の1位は「温泉」、2位が「食」。「食」は伊豆半島南西部の市町で展開している「ご当地グルメ」をさらに磨き上げてアピール。

「温泉」は、中・西・南伊豆エリアに学生旅行の時期に合わせて「お湯マジ」を導入、話題性を高めていく。なお、2015年度に実施した大分県の「お湯マジ」は、会員登録者の90%弱が県外から、また利用者のうち、初めて大分県を訪れた人の割合が68.6%を占め、一定の誘客効果が得られている。

参考)「お湯マジ」とは

立ち寄り温泉入浴無料をきっかけとして若者を地域に呼び込み、結果として滞在・回遊してもらい、地域・施設の認知や宿泊に繋げる全国キャンペーン企画です。

■対象者

- ・19歳～21歳の若者

■実施期間

- ・秋 ～ 翌年春に実施

■提供クーポン内容

- 専用スマートフォンアプリで、対象者へ曜日限定で立ち寄り

入浴料を無料とするクーポンを提供

※タオル貸与・販売、その他施設内の付帯サービス等は別途徴収いただけます

※利用条件（掲載時期／利用除外日／曜日・時間帯制限など）については可能な範囲で自由に設定可能

- 無料提供回数：19～21歳までの3年間で1人あたり 1施設1回 まで



<提案 2> 熟年層×車。伊豆半島東西を横断する企画

課題：東部、西部の周遊が実現されていない

打ち手：沼津港を起点に西部、東部の周遊を喚起する

ターゲット：車で来訪する東京都、神奈川県、静岡県の50～60代

時期：12～1月

企画内容

沼津市は伊豆半島でも季節変動が小さいエリア。また、東名・新東名のインターチェンジがあり、車の来訪者には首都圏、静岡方面ともにアクセスしやすいエリアである。

また、50歳以上の男性64.7%が国道1号線、東名高速道路、県道22号、県道67号を利用し、自動車の割合が高い。

沼津市から伊豆半島東部を周遊するには自動車の利用が必須のため、ターゲットは自動車の来訪者に絞り、旅の動機を食と絶景のゴールデンルートでつないでいく。

高価でも質が良いものに共感する50代以上に向けて地域資源を磨いていく。

ゴールデンルートは観光地の相関関係の分析、「沼津港」を起点としたルートとする。

1日目は沼津港と西海岸の富士山、夕陽の「食と絶景」をテーマにした旅。

2日目は中伊豆で、昼食のイズシカ丼を食べ、葎山反射炉を經由しながら東海岸に向かう。

3日目は朝日の見える温泉に入浴し、国道135号沿いの道の駅に立ち寄り地場産品を購入し旅をしめくくる。旅なれた熟年層にはモノではなく、コト（ストーリー）でなければ共感されない。

伊豆半島ならではの「食と絶景」を西海岸から東海岸への横断で打ち出していく。なお、発地のPRはWEB広告に加え、東京都南西部の交通広告を活用。着地のPRはコト（ストーリー）が伝わる仕立ての着地型パンフレットを配布していく。

■まとめ

今回、観光客の行動及び動態を把握することにより、伊豆半島地域の観光の実態が明らかになった。今後、滞在時間を延ばし観光消費額を上げ、地域を活性化するには「北部から西・南部」「東部から中・西部」の連携が最も重要性と言える。まずは、隣接する市町間が地域資源の整理を行い、相互の周遊を積極的に進めていくことが大切である。

旅は特定の市や町を目当てに行くのではなく、「食」「温泉」「自然・風景」「歴史・文化」「体験」「イベント」などの地域資源に共感し動機づけされ、経路や交通手段を調べてでかけるものである。

どの資源とどの資源を組み合わせれば、カスタマーにより強い動機が生まれるのか、そして観光客の誘致を行うにはどのようなプロモーションが効果的で経済的合理性があるのか、美しい伊豆創造センターの会員である行政、交通事業者、観光協会や旅館組合、商工会議所や商工会などが一丸となって、議論・検討していくことが重要ではないだろうか。

少子高齢化で地域の担い手が減る中、イノベーションなく地域の発展はない。伊豆半島の基幹産業である観光業に対し、新しい価値を創造しながら今の需要を的確に把握し、変化に対応しつつ新規の顧客を常に関拓し続けることが重要である。

